

2022



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
1 月号
No. 703

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





謹賀新年

皆様のご健康とご多幸をお祈り致します。

二〇二二年

令和四年

壬寅（みずのえとら）

二〇二二年は寅年。干支の「壬寅」にあたる。

「壬」は10段階の9番目で生命循環の終わりの位置に近く、次の生命を育む準備の時期。字の壬は「妊む」に通じ、水の兄とは陰陽五行説の「水の陽」のことで厳冬、静謐、沈滞を表す。

「寅」は12段階の3番目で生命循環の初めの位置に近く、誕生を表す。寅は弓矢を両手で引き絞る形から生まれた字で、動き初め、胎動といった意味を持つ。陰陽五行説では「木の陽」にあたり、強く大きく成長することも表している。

「壬」と「寅」は「水生木」という「相生」の関係にあり、水が木を育み強くするイメージ。

「納言」という物差しによると壬寅は「金箔金」で、傷つきやすい脆さはあるが本来もっている金の資質を生かすために鍛錬すれば成功につながることを意味する。

大きな成長の前段階として、良い資質に磨きをかけて実力を養う、そんな年になりそう。まずは自分身の良いところを再認識しよう。



春よ来い♪

△2頁の花▽ 仙溪

花材 路の臺ふきのとう (菊科)

路の葉

椿2種 (椿科)

花器 銀滴抹茶碗 (近藤高弘作)

昨年3月初めに、春の訪れを感じながら庭の花を特別な器にいった。毎日、心豊かに季節を味わっている。



正月花のいけなおし

△3頁の花▽ 仙溪

花材 枝若松 (松科)

アイリス (菖蒲科)

スイートピー (豆科)

花器 陶花器

松、水仙、千両でいけていたのを、アイリス、スイートピーにいけ替えると、一足早い春を感じられる。





松除真の立花

△4頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花

花材 松(松科)

梅擬(繡の木科)

水仙(彼岸花科)

木瓜(薔薇科)

霧島躑躅(躑躅科)

小菊3種(菊科)

晒木

花器 天女文銅花器

松が好きで年中見ているのだが、秋が終わる頃から存在感をますのが毎年のことである。冬の木瓜と水仙がひっそりと咲き、梅擬の実に目がいく。これから咲く椿ともう時期が終わる菊がともに控枝の景色を作っている。次の季節を感じさせる立花である。





梅擬の生花

△5頁の花▽ 健二郎

花型 生花 草型 副流し

花材 梅擬(繭の木科)

花器 遊環耳付銅花器

副流しの生花。枝振りを生かしながら。竹筒に生けると安定が悪く銅器に生け替えた。実が強く見えて格好良くなった。



レモンちゃん

4週間前に鉢から切っつけていた大菊。今も玄関の水溜に浮かべています。(写真は3週間目の12/9撮影)





八重の水仙

△6頁の花▽ 健一郎

花材 水仙(彼岸花科)

山茶花(椿科)

花器 陶小壺

花屋さんを通して農家さんから頂いた八重の水仙。実際の水仙峽へ足を運ぶと八重のものや奇形の水仙を見かける。この水仙がよく見えるよう器と相手を考えた。虫食い葉のある山茶花の蕾とよく合う。





器のチカラ

△7頁の花▽ 櫻子

花材 千両 (千両科) せんりょう

シンピジウム (蘭科) ばら
薔薇 (薔薇科)

花器 陶花器 (柳原睦夫作)

不思議な形の器だ。三方にお団子がついている。手に持つとコロンとした丸みが子犬のようで愛らしい。でも中を覗くとふくらみの内側は深い洞窟のようにも見える。色んな顔を持つ器。この器には名前がある。「ふくら壺」という。ふくらは膨らみのことだが、「福良」と書く縁起が良い。そう思つて器を見ると福の神にも見えてくる。器との出逢いで花の見え方が変わる。器のお陰で豊かな温もりを感じる花になった。



いけばなインターナショナル
京都例会
デモンストレーション

会期 11月16日(火)

会場 京都ブライトンホテル

講師 桑原健一郎(写真①～⑦)

デモンストレーションのお話をいただいた時には嬉しくて仕方がなかった。飛び切り綺麗な花と、自分の花と向き合う様子が少しでも伝わっていればと思う。自分が思う好きな花をたくさんの人に見て頂くことができた。(健一郎)

アタラシイいけばな

×

モクテル体験

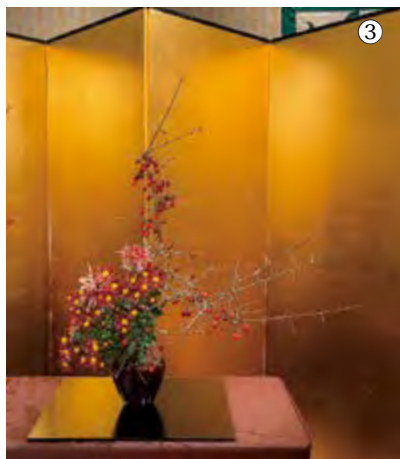
会期 11月19日(金)～20日(土)

会場 エースホテル京都

講師 桑原健一郎(写真⑧～⑨)

ここ数年空間を隔てるしきりの文化に注目し、イベントに合わせて屏風をこしらえた。参加者一人一人の「らしさ」を屏風につけて、集めることで、その場限りの空間の創出をねらった。全員のいけばなが集まって、一つの作品になっている時間は、各回15分ほどだったが、見応えは十分。見事な花の空間であった。

イベントを通して、花だけでなく時代に耐え抜いた文化を次の世代に引き継ぐ事ができるきっかけになればと願っている。(健一郎)



③ロウヤガキ、ヒゴギク、キンパイギク。 ②キリシマツツジ、ミダレギク2種。 ①マツ、スイセン、ドウダンツツジ、ボケ、ツバキ、コギク他。



⑤マユミ、オオギク、ミダレギク、モミジ。 ④ウメモドキ、オオイトギク、サザンカ。





新春を寿ぐ
 〆表紙の花〆 仙溪

花材 松(松科)
 薔薇(薔薇科)
 エビデンドラム(蘭科)

花器 銀彩陶花器(森野泰明作)

自由に枝を伸ばす松とこの黒銀の器はどちらも風格と軽妙さを併せ持っている。両者の出逢いがつくる特別な雰囲気。いけばなの面白さはこういうところにこそあるのだと思う。赤いバラと白いランも絶妙なバランスに役買っている。



京都嵐山花灯路 桑原仙溪(写真⑫)
 12月10日(金)～14日(火) JR 嵯峨嵐山駅前
 今回は最後の嵐山花灯路に多くの人が訪れていた。
 花材：桐、ホーリー、垂柳檜葉、百合

『信仰の場』

健一郎

信仰の対象となる場に興味が
あり、暇もあるのであちこちへ
まわる。今回は鳥根県の出雲大
社と鳥取県の投入堂を目的にい
くつか巡ってきた。信仰の対象
は世界に目を向けると特異なも
のがあるが、自然に対するもの
であつたり自然を介するものが
多い。理屈なしに信じることが
できる説得力を持つ場や物はそ
う多くはないだろう。

出雲大社の御本殿から特別な
何かを感じた。人工物であるは
ずだが、自然的な魅力を感じる。
それは大社を構成する柱や装飾
がそうさせてるのであろうか。
不思議な感覚だつた。というの
も、場そのものからは強い何か
を感じ取ることができなかった
からだ。

大社からは理屈なしに信じる
ことができる説得力を感じた。
伊勢神宮や、大神神社の周りの
自然から感じられる場とは違
い、つくられた場であるかのよ
うだつた。信仰する態度が形と
なつて現れたものだろうか。も
ともと特別な場であつたのか特
別な場を作つたかの違いであろ
う。どちらも特別な場であるこ

とに変わりはない。出雲の大社
と伊勢の神宮の在り方は違え
ど、見て感じた不思議な感覚は
どこか似ている。

出雲大社の神殿は他の神殿と
見比べても大きかつた。今の本
殿の高さは24メートルであるら
しいが、4世紀ごろに作られた
という本殿の高さはビルの15階
建てに相当するそう。最近、
巨大な柱が新たに発見された
り、現存する絵図から専門家が
調べたところ、これが有力な説
であると聞いた。出雲大社の高
さとその大きさが、理屈なしに
信じることができる説得力を生
み出したのだらう。出雲大社の
本殿や、構成する社、一定の間
隔に植えられた松からも神秘さ
や凄みを感じた。

想起されるのが樹木信仰であ
る。日本はもちろん、ユーラシ
ア大陸一帯にもみられる信仰
だ。ヨーロッパでは真っ直ぐに
伸びた針葉樹を切り倒して立
て、周囲で踊るメイポールとい
う五月祭がある。日本の水口祭
りに似た意味を持つ祭だ。同様
にクリスマスツリーも樹木信仰
が強く関係している。高さは大
切な要素なのだろう。

そしてこの心や本質は立花の
真として形を変え残っている。

日本では杉や檜などの常緑針葉
樹の大本は、天から神様が降り
て宿するという観念で注連縄を張
り、御神体として崇められてい
る。後に立花の真になり、門松
も繋がっているといわれている。
出雲大社の高さへの意識と
関連していると思う。積み木を積
み上げるのも高いタワーを作る
のも似た物だろう。

地元の方に聞くと年間を通し
て風が強く吹くため家の周りに
松を植え、家を守つたそう。近
年の台風増加により松が倒れ
ることから築地松もなくなり
つつあると聞いた。僕が出雲に
おとづれた際は神社の周りに築
地松があるぐらいだつた。稲佐
の浜に行くとき強い風にさらさ
れ続けている松と出会つた。一足
先に咲いている椿を撮影するも
止まつたところを撮影できな
かつた。出雲で感じた風や海の
波、太陽は古事記を少しばかり
思わせる場だつた。色濃く残つ
ていたと言いつらいが、残り
香を嗅ぐことができた。

米子から車を1時間半ほど東
へ走らせると三徳山の三仏寺に
着く。三仏寺の投入堂までの参
道はおもしろかつた。修験道
の開祖であると言われている
役の行者が投げ入れたという御
堂だ。なぜこの場所を選んだの

か。ずっと気になっていた。二
足歩行できないほど急勾配の参
道を手も使い登っていく。岩や
木の根を頼りに、這い上がる。
途中で鎖を使わないと登れな
い場所や、ここから足を滑らせ
たら命を落とすであろう箇所が
何箇所かあつた。周りの景色を
楽しみながら楽しく登つた。登
拝というよりは好奇心で投入
堂までの道中を楽しんだ。和装
を着かけているとなんだか僧侶
のままごとをしている気にもな
る。

投入堂は建築的にも強い関心
を寄せられている。人の手に

よつてつくられた御堂だが、山
に溶け込み違和感が全くない。
むしろそこになければならない
と思わせるほどに存在感がな
いことが強く気になった。理屈
なく納得できるのは気持ちがい
い。建物が景色に溶け込んでい
たように感じた。静かに強くそ
こに在つた。見事である。

理屈なく納得できるような、
静かに強くそこに在る花を生け
たい。そしてその花が場に溶け
込んでいると存在感も無くなる
のだろうか。その時には私もそ
んな人になつていだろうか。



三徳山の三仏寺投入堂への参道の途中の文殊堂にて。

松之一色

花伝書を見る

松の二色（松の二色真・初版）

桑原治郎兵衛（富春軒・初版）

松 苔

（立花時勢粧・下 秘曲の図）



桑原治郎兵衛

立花時勢粧「松一色」

この絵図は木版刷りに彩色されている。墨色だけの絵と比べてみると、苔生した枝や赤茶けた松葉の微妙な味わいが絶妙に彩色されているのがわかる。

想像だが、富春軒仙溪が絵を描き、彫り師、摺師によって木版刷りができた時点で、絵師もしくは富春軒本人によって念入りに彩色が施された

のだろう。

流祖の息吹を感じてもらいたくて、原寸大で掲載させていただいた。3月に立花時勢粧333年・桑原専慶流いけばな展を予定している。タイトルは「花の芸術」。代々の家元が大切にしてきた「花を敬う心」で皆さんと共に花をいける日を楽しみにしている。

仙溪



水仙 金盞花

△12頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 主株 水仙（彼岸花科）
副 水仙（彼岸花科）

子株 金盞花（菊科）

花器 陶水盤

キンセンカは冬から春に咲くヨーロッパ原産の花で、古くから栽培され立花時勢粧でも「水仙一色」の前置にホンキンセンカ（一重咲き小輪）が使われている。（テキスト676参照）

花色がスイセンと良く合っている。上品ないけ方で、温かな色を楽しみたい。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
2 月号
No. 704

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





春の兆し きざ

△表紙の花▽ 仙溪

花材 喇叭水仙 らっぱ (彼岸花科) ひがんばな

椿「白佐助」 わびさけ (椿科)

花器 飴色釉陶花器

この花器の飴色は雪融け水が滴 したたる岩肌 いづまのようだ。春の兆 きざしを感じ かんじる花 はなが良く映 うつる。括 くれた器形 きぎょうに自然 しぜんの息吹 いきぶを感じる。



鮮やかな花色

△2頁の花▽ 櫻子

花材 赤芽柳 あかぼし (柳科)

アネモネ きんぼうけ (金縷花科)

ミリオクラダス ひやくりく (百合科)

花器 ガラスコンポート

まだまだ寒い季節。心も体も萎 い縮 しゆくしがちだが、部屋にアネモネがい いけてあるだけで、気持ち きもちが明るく晴 はれやかになる。

アネモネにはユキヤナギやコ



デマリのような小花の花木か、クロメヤナギやネコヤナギがよく似合う。



咲いた咲いた

△3頁の花▽ 仙溪

花材 青文字（楠科）

チューリップ2種（百合科）

花器 陶コンポート

チューリップの野生種は地中海沿岸から中央アジア、中国天山脈、西シベリアの広い範囲に原生する。そんな異国の花が私達の暮らしを彩ってくれている。



有楽椿

△4頁の花▽ 仙溪

花材 啓翁桜（薔薇科）
アイリス（菖蒲科）

椿「有楽椿」（椿科）
花器 小紋柄陶花瓶

ウラクツバキの紫がかった薄紅色は華やいだ印象。シャープな葉と仄かに香る小さな花に独特の存在感がある。ケイオウザクラ、アイリスと、小紋の器。織田信長の弟、有楽斎も気に入るだろうか。



共に作る

△5頁の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 副流し

花材 啓翁桜（薔薇科）
煤竹竹筒

生花の型には華道が生み出した普遍的な美しさがある。手に



レモンちゃん
お正月の合間にいけばなの色
紙を描きました。ときどきレモ
ンちゃんがチェックに来ます。



した花材で美しい姿を作るわけ
だが、いけ終えた後も次々花が
咲いてくれるのが理想だ。形を
作る時、花材によって力加減や
撓め方を変える勘が必要だが、
花の協力を得て共に作るという
謙虚な気持ちを持つていたい。

桐 垂柳檜葉

△6頁の花▽ 健一郎

花型 生花 二種挿し

花材 桐(桐科)

垂柳檜葉(檜科)

花器 龍手付銅花器

挑戦的な生花だ。真逆の性質を持つ植物が銅器の中で出逢っている。それぞれの個性が思う存分に発揮されている。季節を思わせる取り合わせなら違和感がなく、どこか説得力がある。中国では鳳凰が止まる木として神聖な植物とされてきており、その文化は日本の花札^{はなふだ}を見てもその影響が見られる。格好のいい枝に恵まれた。

松 一色

△7頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花^{のきざん}

花材 松(松科)

蛇の目松(松科)

晒木

花器 遊鑲付銅花器

日本中どこへ行っても松を見かける。葉もさることながら枝振りにいつも魅了される。私がよく鑑賞する木の中の一つであ



る。一色物にされる植物には複雑な特徴、多面的な魅力を持っていて格好が良いものが多い。それはどれだけ人に見られたか、或いはどれだけ人の身近にあったかが強く影響されていると思う。松、水仙、桜、杜若、蓮、楓、菊。恐らく他にも一色ものの様式に耐えうる植物は多く存在すると考えている。

『隠居生活』

健一郎

ここ一年くらい家元に隠居生活を勤めている。自分が家元になれるよう席をあけてもらおうとして半分冗談、半本気で勤めている。それは自分が最強の家元になった後に隠居をしたいと強く願っているからだ。隠居をするためには人に伝え、継承させる必要がある。

300年程前、江戸の町人の間では隠居がブームだったそう。そうでもなければ一日仕事である立花をこさえることは難しい。そして多くの人の夢は隠居をすることだったらしい。当時は公的な年金制度も整っておらず、金銭に余裕がないとできなかった。今よりハードルははるかに高いだろう。隠居後の道楽は寺参り、囲碁、将棋、園芸、釣り、骨董などがあつた。寺参りが一番人気があつたらしい。今でいう旅行のようなもので他所のものを食べ、綺麗な景色を見て、お土産を買い自分の家に帰った。

元禄の立花の流行と共に格好の良い枝を探して売る人が徐々

に増え、今の焼き芋屋さんの様に歩きながら売って回る人もいたそう。江戸時代は植木職や、植木に関わる人が一番多かった。明暦の大火以降の園芸ブームから広い農地を活用して樹木や花卉の栽培を行い、それは植物園のような規模であつたという。経済的に苦しい御家人の間では内職として苗木の生育や盆栽作りをする人があつた。「鉢物師」「苗木師」が生まれ、花屋さん、種を売る人と業態が分化した。長屋の路地裏にまで鉢植えが置かれるようになった。

この時が園芸の全盛期であろうか。趣味が細分化された現代とは違い熱中の度合いや、互いに自分の鉢を見せ合い、笑っている姿が目につく。

隠居とは呼べないが、私は悠々自適の生活を送っている。時間だけの尺で見れば、隠居と似たようなものなのかもしれない。時間を沢山持つており、予定のない日が沢山ある。こんな幸せなことはない。自分がしたいと思つたことを自分の都合で初め、いつでも中断することができる。誰に気も使わないので気が楽だ。だがしたいことが無い場合を考えた途端に時間があ

ることに對して恐怖に近い感情を抱く。隠居後に打ち込めることや楽しみが必要だと多くの人が直面するとよく聞く。

今思い返すと学生時代、僕を含めて周りの友達も暇が怖かつたのかと思う。常に予定を詰め込みスケジュールに忙殺されることで暇を忘れようと、距離をおこうとしていた。そして予定があることは自分の価値が認められてると感じる。1人でいることに對するなんともなくの寂しさも混ざっていたかもしれない。何もしてなくても十二分にその存在はかけがえのないものなのに。存在価値が認められないと思つているのは自分だけであつて周りからの評価は関係がない。第一、人によつて評価される筋合いなんかあるわけがない。

人のために時間を使い、生きる人生も素敵だ。なかなかできることではない。だがそれは本当に人のためなのだろうか。暇を忘れようと、自分を欺く為に時間を使つていたとしたらもつたに感ずる。自分の価値を低く評価している。時間をどう使おうがそれは自分の時間である。何かの雑誌に面白い記事が載つていた。その記事によると2000年以降、世界中の人々の余暇の時間は減少しているという。昔より労働時間が短くなつているのに時間が足りないといふ多くの人が感じているそう。徒歩でなく新幹線に乗るようになり、手紙でなく電子媒体上でやりとりをするようになって久しいのにも関わらずだ。人はどこまで忙しくなるのだろう。明日食べるものがないので狩りに行つた時代から文明は移り変わり、時間ができたように思うのだが、私の周りに食べるものに困っている人はいない。なんて恵まれているのだろう。だが時間には追われている。

ともない。今のところ豊かな気持ちになるのにお金はあまり関係がないらしい。

今は隠居でこそないものの時間のある日々を過ごしている。自分に素直になりしたい事だけしている。最強の家元になるためにしなければいけない事を一つづつこなしていこうとしているが、今は意識をしていない。現在は習慣化され、後は時間を待つのみになった。全く無理はしていない。毎日が刺激で日常をゆつくりと味わっている。隠居後、考え方は変わつていいると思うが、今は日本各地に数年づつ住み、各地の四季を肌で感じて周りたいたいと考えている。

労働時間が短くはなつていもの、多くの人は時間の大半をお金を生み出すために使つている事になる。働くことは大切であるが、なんのために働いているか一度ゆつくり考えてみても良さそう。

私は休日に御所で通行料を支払つたこともなければ、鴨川で寝そべつて金銭を求められたこ

花伝書を見る

立花 檜除真
 「松の前置」 富春軒
 檜 晒木 沢水木 水仙
 松 苔 枇杷 櫻木
 (立花時勢粧・下 秘曲の図)



富春軒

立花時勢粧「松の前置」
 水際の松と中央の晒木
 がつくる深山幽谷の景色。
 水仙は仙人のようである。
 檜の曲線と沢水木の直線
 が絶妙。苔生した小枝が
 効いている。
 仙溪

花の芸術

ART OF FLOWER

2022 年 3 月 2 日(水) → 7 日(月)

1 期 3 月 2 日(水)・3 日(木)

2 期 4 日(金)・5 日(土)

3 期 6 日(日)・7 日(月)

2 日(水)、4 日(金)、6 日(日) は午前 10 時～午後 6 時

3 日(木)、5 日(土)、7 日(月) は午前 10 時～午後 4 時

入場時間は各日閉場 30 分前まで
閉場時間が早くなっておりますのでご注意ください

大丸ミュージアム〈京都〉[大丸京都店 6 階]

入場料(税込) 1,000 円

大学生以下無料

桑原専慶流

KUWAHARA SENKEI RYU

いけばなって何だろう

いけばなは花と協力することで生き生きとした美をつくりだす芸術です

自然の一部を切り取り器に入れることで花たちが新たな物語を語り始めます。

花と良い関係を築いて心を通わせ、それぞれの個性を存分に発揮させる。

それにはいつ頃どんな環境に育つのかを知り、花を生かす技術が必要です。

花は大切に扱い心をこめていけると必ずそれに良い表情で応えてくれます。

肝心なのは花を敬う気持ちです。

すべての命を尊び、花と一緒に綺麗なもの何か人をほっとさせるものをつくりあげる。

それがいけばなの究極の姿だと思います。

桑原専慶流家元 桑原仙溪

※入場料は京都市に寄付します

のうえ、お越しくださいますようお願い申し上げます。なお、会場の混雑状況により、お客様の安全確保のため、入場制限をさせていただく場合がございます。あらかじめご了承ください。

丸

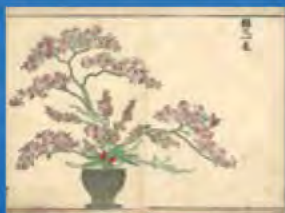
京都店

電話(075)211-8111



立花時勢粧 333年

RIKKA IMAYOUSUGATA



開催情報をご確認ください→
www.kuwaharassenkei.com



新型コロナウイルス感染症の影響等、諸事情により本催事は事前に予告なく中止または入場時間が変更となる場合がございます。ご来場の際は、ホームページ等で事前にご確認

開催情報をご確認ください→
www.kuwaharassenkei.com



DAI



「花の芸術」

立花時勢粧333年

桑原専慶流いけばな展

立花時勢粧333年（昨年）の節目を記念し、3月に流展を開催します。時代は大きく変化してきましたが、花と共に生き生きとした美を作ろうという気持ちは当時も今も変わりません。コロナの対応としてネット上でも鑑賞可能にし、また今回の花展が社会の役に立つことを願って入場料収入全額を京都市に寄付します。多くの方にご覧頂ければ幸いです。 仙溪

素朴な味わい

△12頁の花▽ 仙溪

花材 照葉樹（椿科）
てりはつばき

菜の花（油菜科）

花器 陶花器

素朴な味わいを作るのは難しい。地味すぎたり寂しすぎたりせず、シンプルんだけどキラッと光る魅力がある花がいけられるようにしたい。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
3 月号
No. 705

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





エジプト花瓶

△2頁の花▽ 櫻子

花材 雪柳（薔薇科）

菜の花（油菜科）

レリア（蘭科）

花器 金属花器（エジプト製）

エジプト製の真鍮銀象嵌瓶。つい磨きすぎて最初の頃よりも大分色が違ってきた。金ピカの花器になってしまつて明るい春の花が似合うようだ。黄色い菜の花、カトレアに似たオレンジ、ピンク色のレリアをいけた。

今年は冷たい日が多く雪柳もまだ少し弱々しかったが、派手な色の中へ溶けこんで元気いっぱい。





ニオイイリス

△3頁の花▽ 仙溪

花型 生花 行型

花材 ニオイイリス (菖蒲科) あやめ

花器 金属装飾陶水盤

(モロッコ製)

いけばな花材にアヤメの仲間が多い。日本のカキツバタ、ハナショウブ、シャガ、ヒオウギもアヤメ科だ。洋種では細い葉を広げるアイリス（オランダアヤメ）は春の花木との相性がいい。最近ではトルコ周辺原産のオクロレウカ（長大アイリス）の花もよく見かける。フリージア、グラジオオラスもアヤメ科。

それらに先駆けて早春にニオイイリスが咲く。地中海沿岸原産で芳香があり根茎から香料をとるのでこの名がある。白い花色に気品を感じる。この花を元にした紋章が長くフランス王家で使われてきたそうだ。西洋の花を東洋の感覚でいけた。





嫩葉（わかば）

△4頁の花▽ 仙溪

花材 金葉小手毬（薔薇科）

ガーベラ（菊科）

ストック（油菜科）

花器 陶コンポート

「嫩」という字には「わかい・やわらかい・みずみずしい」といった意味があるので「嫩葉」を「わかば」とか「ふたば」と読む。「嫩」の音読みは「どん・のん」である。あまり使う事のない漢字だが、知っておくと何だか物知りになった気分を味わえる字だ。

今年も若葉の季節がやってくる。私達が寒い寒いと言っている間にも、植物たちは葉を広げる準備を怠らない。寒さに耐えた先に、温かな光の季節が来ることを知っているのだ。

金葉小手毬の若葉にストックとガーベラが優しく寄り添う。





花の勢い

△5頁の花▽ 健一郎

花材 連翹(木犀科)

椿(椿科)

花器 陶花器(市川博一作)

数え切れないほどの連翹の花。上品に光を反射させ、見事に咲いた椿。共に見事である。お花の前で寝転がると僕より大きい。大きさだけでなく強い勢いのある枝だった。溢れんばかりの生命力が紙面越しでも伝わる。華道家の喜びである。その内に大きな木を丸ごと家に引きずりこみそのような勢いだが、切花の美しさには特別なものがある。春が間近の好きな瞬間である。

花が見る夢

△表紙の花▽ 仙溪

花材 小手毬(薔薇科)

ガーベラ(菊科)

花器 陶コンポート

(柳原睦夫作)

この柳原睦夫さんの器は見ていてワクワクする。ピンクと黄色の雲が紺色の空に浮かんでいる。



メイちゃん大きくなりました。庭デビューの日、レモンちゃんが見守ってくれました。



る。模様からの連想で、コデマリを数本、白い雲がモクモクと湧き出るようにいけてみた。ガーベラで茜色を加えると夕暮れ時に赤く染まった空を思い出した。花の表情は器によつて変わる。コデマリの後ろに立てたガーベラは、雲に乗った夢を見ているような柔しげな顔をしている。



芍薬の生花

△6頁の花▽ 健一郎

花型 生花 真型

花材 芍薬(牡丹科)

花器 耳付陶コンポート

花が咲くのは楽しみである。芍薬の花は咲く姿を想像するも、毎度その想像を超えた迫力を備えている。咲いた時を考え、あまり本数は入れない。少し葉に力がなく見えるのは花を咲かせた安心感からだろうか。間も無くして散った。





花の器

△7頁の花▽ 仙溪

花材 満天星（躑躅科）

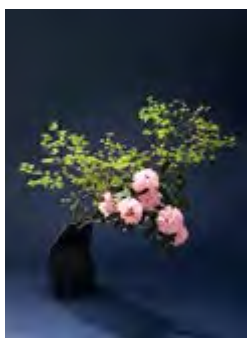
石楠花（躑躅科）

花器 陶花器（竹内眞三郎作）

「立花時勢粧」に使われている器の種類は96種類もあり、それぞれ形も装飾も違うので見ていて飽きない。またそれが器の上の立花の雰囲気と絶妙に合っているところが凄い。

今、家にある器も様々で、いきたい花に合う器を考えるのが楽しい。花が器を気に入って居心地良さそうに見える、そんな基準で選んでいる。

この写真のドウダンツツジもシャクナゲもかなり大きな枝である。竹内眞三郎氏の黒い岩のような器は、どっしりとした安心感と、切り立った崖のような緊張感を併せ持つ。挿した枝の風格を引き出してくれる。



『私とレモンとお花』

健一郎

家にいるレモン（飼い猫）は今年の5月で10歳になる。人間で言う56歳に相当するそう。家に来た頃は、僕より年下だったはずだが、随分と歳を追い越された。来年には家元と同じ年になり、じき追い越すだろう。

自分が感じた1分はレモンにとつての何分なのだろう。時間を数字で把握していないであろうレモンとの比較は難しいが面白いので考えてみることにした。こうして考え事をしていると時間がすぐに経つ。

思い返してみると、自分の落ち着きの無かった幼少期は時間が経つのがなんと遅かったことか。人一倍の体力を持ち、走り回るのにずっと付き合ってくれる人は珍しかった。特に大人に対しては大きな不服を申し立てていた。「いつまでゆっくりしてるの？」と母親に尋ねても、「今やっと休憩したとこやしもう少し休ませてよ」と返事が返って

きた際は時間の感覚のずれにイライラしていた。なんともゆっくりと動き、いつまでもつるぐのかと、大人という生物を不思議に思っていた。1分の違いに初めに違和感を覚えた時である。

いつだったかは忘れたが、面白い本を読んだ。その本によると体感時間と脈拍には大きな関係があるそう。つまり、体の大きな動物ほど時間はゆっくりと経過し、体の小さい動物ほど時間は早く経過する。同じ1分でも、生物によつて流れる時間が異なるというわけだ。

ゾウにはゾウの時間、ネコにはネコの時間、そして、ネズミにはネズミの時間と、それぞれ体のサイズに応じて、違う時間の単位があることを、生物学は教えてくれた。生物におけるこのような時間を、時計の時間と区別して、体感する時間と考える。体が16倍大きくなると二倍ゆつくりと時間が経過する。

この考えを是とするなら、同じ1分という時間でも、ゾウ

ウはとても短く感じるが、ネズミはとても長く感じていると考えられる。大人と子供の体感する時間と時計の時間の差と同じことが当てはまりそうである。平均すると大人と子供の脈拍の差が一分間に10以上ある。子供は脈拍が早いので、過ぎる時間が長く感じられるのだろう。

さらに、ハツカネズミの寿命は2〜3年、象は70年以上生きるが鼓動は20億回と同じであるそう。通常、生物の体の大きさに寿命が比例しているのだが、例外はある。人だ。医療の進歩で人の寿命は30歳ほどだったはずなのに今では80ほどになり、百年になるとも言われており、非常に興味深い個体であることは確かだ。

苦しいことをしている時は時間が長く感じるものと言われるが、それは、苦しいことをしていると拍動が速くなるので、それに伴つて体感する時間が遅く経過しているからだろうか。つまり、体感する時間が早く経過し、時計の時間は遅く経過していると感

じるわけだ。

御神木として祀られているような常緑の大本などは1000年を超えた個体は数多く発見されている。動物で例えるならばエネルギーを大切に使い、大きな個体であるゾウにあたるのだろうか。それに比べ、広葉樹の桜などは数百年である。毎年花を咲かせ、葉を落としたりと忙しい。植物の脈拍を測ったことはないが、エネルギーをたくさん使っているハツカネズミと似ているところがある。

算数が得意でないので計算する気にもならないのだが、人にとつての1分と身近な木の感じる1分位は大きな隔たりがあることは間違いない。僕の曾祖父も見ていたであろう庭の寒椿は私たち家族のことをどう感じているのだろう。

1分の感じ方に大きな隔たりが植物と人の間では大きい。大人と子供の時間感覚の比ではない。少しでもゆつたりとした気持ちで、少しでも長く植物と居ることが、植物

に寄り添う事になるのだろう。

狩猟をしていた時代は木化けや、石化けをして獣や魚に人の気配を悟られないよう、木や石に化けていた。おそらく木や石に呼吸を合わせることなのだろう。狩猟はしながなく大きな木や石の上で感じたあの感覚に近いものだろうか。見て感じるだけよりかはるかに本質的な何かを感じた。

人が植物と共にある事は考える以上に難しいことなのかもしれない。人は一緒にいた気になつていただけのことかもしれない。時間に追われて生けるお花は植物の気持ちを置いてけぼりにしているものになるだろう。

私とレモンとお花は一緒に時間をよく過ごす、同じ時間だけいても同じだけの時間は感じていないらしい。それぞれがそれぞれの時間の中に在る。

櫻之一色

花伝書を見る

立花 桜の一角

(初版では富春軒)

桜 苔木 万年青 羊歯

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

立花時勢粧「桜の一角」

まるで1本の桜の大樹である。桜花の間に若葉が覗いている。山桜である。

桜は諸花の頭であり、桜を尊美す心をもって立てるためには、花の咲くことのない草木をあしらひだけに用いるようにし、あくまでも桜が主役となるような配慮をもとめている。

桜には晒木は使わず苔木を添えていることも自然を手本にした表れである。自然の美しさを敬う心を強く感じる。

桜一角は3図あり、この絵が最初に登場する。初版では作者は「富春軒」で題は「桜一角真」となっている。

る。後刷本では作者名と「真」が削られている。

立花時勢粧333年「花の芸術」展では桜一角に挑む予定だ。すでに本桜という品種の大枝を切って開花調整してくれている。私にとつて初めての桜一角を楽しみにしている。

仙溪





ラナンキュラス

△12頁の花▽ 桜子

花材 ラナンキュラス（金鳳花科）

アルストロメリア（百合科）

路の葉（菊科）

花器 金属裝飾陶水盤（モロッコ製）

黄色の色鮮やかなラナンキュラス。大輪で茎もしっかりと長く咲き続ける花になったのはいつ頃からだろう。昔はひ弱で足元に添えるだけの花だったのに。今は春の花として一番人気かもしれない。

家の近くにある花屋さんに入ると、正面の一番目立つ処に春は色んな彩りのスイトピーが売られている。夏から冬の間は殆どトルコキキョウで時々ヒマワリ、リンドウが置かれる事がある。

同じ花が色違いで7、8種類並べられるのだから素敵でうつとりしていつも数種類同じ花を買ってしまう。この場所に並べられる花は一番良く売れるはず。ラナンキュラスはまだそこに置かれた事はないが、沢山の種類が揃えば飾ってほしい。

高価な花だがびっくりするほど長く日持ちする。もう暫くするとラナンキュラス・シャルロットという品種が出てくる。アネモネのような咲き方でエキゾチックな花。食卓に一輪だけ飾りたい。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
4 月号
No. 706

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



花の芸術

ART OF FLOWER

立花時勢粧333年

3月2日～7日

大丸ミュージアム〈京都〉



富春軒桑原仙溪が著した花伝書「立花時勢粧」。その中に「木の天然自然に従ってその生まれ持った生きる働きを導く」ことが挿花の極意ととれる箇所がある。そんな気持ちでこの桜の老木を立てた。皆さんが毎日水を入れ替えてくれたお陰で、居心地良さそうに花を咲かせ葉を広げ続けて見事な景色を見せてくれた。幅4m弱の花をやすやすと支える器も凄かった。この器なくしてこの花は成し得ない。手に入れておいてくれた天国の両親に感謝している。 仙溪

桜一色立花 桑原仙溪（十三世家元）

花材／本桜（薔薇科） 卜伴椿（椿科）

花器／白釉彩泥花器 市川廣三



家にある中ではかなり大きい花器だと思うが、今回はとても小さく見えた。清水六兵衛氏の器にikebanaの四方正面の花。陽光桜は天城吉野と寒緋桜の交配種で、大きく成長すると見応えがある。今回ikebanaしたのは3メートルほどの大枝だったが、家元は簡単に留めてくれた。四方へ伸びた桜の枝に板谷名月や雪柳、レリア（蘭）が鮮やかに響き合う。太陽の光を象徴する陽光桜。平和の象徴として作られた桜をikebanaされた事が素晴らしい。

桜の四方正面 桑原 櫻子（副家元）

花材／陽光桜（薔薇科） 河津桜（薔薇科） 雪柳（薔薇科） 板屋名月（楓科） レリア（蘭科）
花器／陶花器 清水六兵衛



庭で育てられているような松でなく、自然に生えている松を特別に頼んだ。立花の型を気にせず、自然にその枝が生き生きとした表情を見せる場に配したら見事な立花になった。初めての経験である。花を生けるとはこういうことかと思った瞬間でもあった。それぞれが味わい深く美しい。崖、深山など様々な場所で見える松の景色を想像させる。松は来場者をどう見ていただろうか。

松一色砂の物 桑原健一郎（次期家元）

花材／松（松科） 松苔木 晒木

花器／銅砂鉢



桑原慶華
アロエ デンドロビウム
器／ガラス花器 エングマン（スウェーデン）



二井慶博（家元補佐）
松 柘植 伊吹 躑躅 杜若 榎木 枇杷 器／銅立花瓶



横田慶重（華老）
唐桃 薔薇 器／陶水盤 宮川香雲



川瀬慶裕（家元補佐）
蛇の目松 洋菊数種
器／染付鉢 中島豊人 中島恭子



武田慶園（華老） 三木慶善（家元補佐）
木瓜 器／陶花器 近藤豊



北川慶法（家元補佐） 山本慶智（家元補佐）
河津桜 牡丹 ミリオクラダス 器／陶花器 竹内眞三郎



米山慶嘉（家元補佐）
枝垂桃 椿 器／陶花器 近藤豊

花の芸術

特別席の15作を掲載します。（会期順）

「花の芸術」
立花時勢粧333年
桑原専慶流いけばな展
3月2日（水）〜7日（月）
大丸ミュージアム〈京都〉
出品者 125人
出品数 96
大作席 3
特別席 15
中作席 39
小作席 39



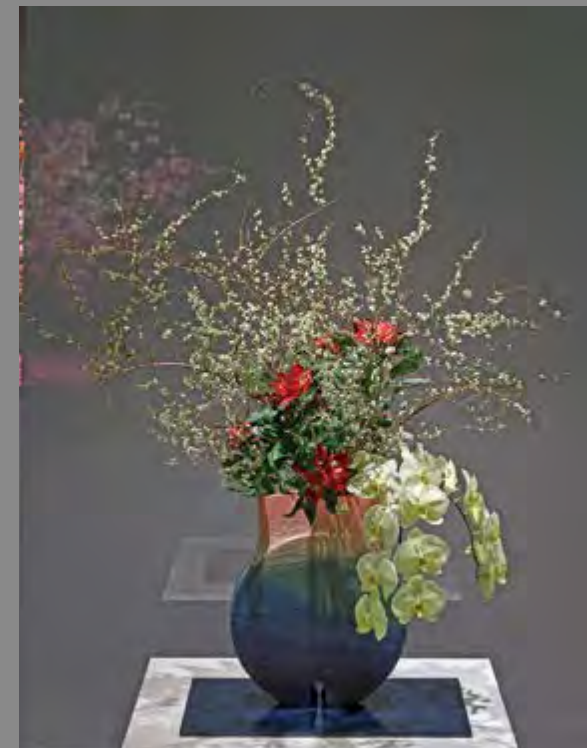
阪本慶純（家元補佐）
白梅^{がっこうつばき} 月光椿 器／松樹天目大鉢 木村盛康



和田慶千（華老）
シンビジウム カトレア パフィオペディラム
オンシジウム アンズリウム・ジャングルブッシュ
ネオレゲリア^{びかくした} 麋角羊歯の枯葉 器／陶花器 森野泰明



朝倉慶佐（家元補佐） 田代慶澄（総目代）
白梅 松 椿 こて檜葉^{ひば} 柊南天^{むいらぎなんてん} 水仙 器／銅立花瓶



長尾慶淑（家元補佐）
雪柳^{こちゅうらん} 胡蝶蘭 アルストロメリア
器／彩泥陶花器 宮下善爾



桑原菜月
連翹^{れんぎょう} 雪柳 ラナンキュラス 器／鉄足ガラス花器



林慶妙（家元補佐）
木瓜2種^{ぼけ} 薔薇^{ばら} 器／青磁壺 米沢蘇峰



小菅慶節（家元補佐）
板屋名月^{いたやめいげつ} 石楠花^{しゃくなんげ} 器／莫庵目小判型花籃^{ござめ かて}



桑原慶寅
苔木 エピデンドラム ミリオクラダス
器／陶花器 竹内眞三郎

「花の芸術」

立花時勢粧333年
桑原専慶流いけばな展

コロナ禍での流展でしたが、風通しの良い設えでゆったりした展示にしたため、過去に経験したことがないような花展になりました。

「花を觀賞する」ではなく「花と時を過ごす」ような新鮮な感覚を持たれた方も多かったと思います。

全てのいけばなを横や後ろからも見ることで、向こうにいけられた花との重なりも心とむ景色になっていました。

会場入口では次期家元の力強い松一色砂の物が迎え



花となり、会場内では私と副家元の桜の大作が31席のいけばなを見守ります。

その31席は各期総替えとなって、それぞれの期の景色をつくっていました。

私達の3作は6日間毎日水を入れ替えて展示。副家元の桜は次第に花色を濃くし、私の桜は会場で花が咲き、葉が居心地よさそうに広がっていました。

ご来場下さった皆様に厚く御礼申し上げます。開催が危ぶまれる中、素晴らしい花材が集まったことに心から感謝しています。

コロナの規制で来られなかった皆様とも、ウェブ上で花展の様子を共有できました。全出品作の写真と花

の名前、器の作者名をご覧いただけます。立花時勢粧のことを知って頂きたい思いで作った解説パネルも公開していますので、いつでも覗いてみて下さい。

皆で花をいけることが何カ世の中のためになることを願い、入場料全額を京都市に寄付させていただきました。他流の先生方にも入場券を買ってご覧いただくこととなりましたが、皆さん快くお越し下さり、また共感のお言葉も多く頂戴しました。いけばな文化が社会を育む方法として、このような花展もあって良いと思います。

いけばなは花と協力することで生き生きとした美をつくりだす芸術なのだ、改めて実感しました。

花の芸術 出品者名簿

通期

桑原 仙溪	家元
桑原 櫻子	副家元
桑原 健一郎	次期家元

1期

桑原 慶華	
横田 慶重	華老
米山 慶嘉	家元補佐
北川 慶法	家元補佐
山本 慶智	家元補佐
二井 慶博	家元補佐
関和 慶弘	家元補佐
杉浦 慶弥	家元補佐
小池 花風	会頭
大塚 輝峰	入門
矢野 慶良	総目代
北村 慶美	総目代
藤田 慶綾	総目代
井尻 慶聡	総華監
安達 慶令	総目代
相内 慶啓	目代
釜井 慶経	華監
中山 慶元	目代
小橋 慶智	総華監
和田 慶年	師範
大野 慶友	総華監
佐藤 慶友	総華監
安藤 慶津	華監
植野 慶栄	華監
永田 慶悦	華監
千田 慶真	師範
谷口 慶喜	師範
浅井 慶知	師範
比嘉 慶志	師範
小倉 慶麗	師範
石黒 慶知	師範
外川 慶美	師範
國府谷 慶知	師範
岡田 慶延	師範
酒井 慶康	師範
空華 慶千	師範
田邊 慶花	師範
織田 慶純	師範
小島 溪月	初伝

2期

桑原 慶寅	
武田 慶園	華老
三木 慶善	家元補佐
川瀬 慶裕	家元補佐
長尾 慶淑	家元補佐
小泉 慶哉	目代
朝倉 慶佐	家元補佐
田村 慶澄	総目代
後藤 慶節	総目代
藤本 慶隆	総目代
森本 慶明	総目代
今村 慶悟	総目代
今村 慶明	師範
滝本 慶由	総目代
赤木 慶希	総目代
白崎 慶穂	目代
河野 慶美	目代
奥井 慶和	総華監
松本 慶季	総華監
鹿野 慶正	総華監
佐藤 慶由	総華監
佐藤 慶美	華監
秋山 慶淑	華監
手塚 慶美	師範
内田 慶雅	華監
井上 慶則	華監
高楠 慶幸	華監
山本 慶紀	師範
宮島 慶啓	師範
大丹生 慶愛	華監
上野 慶里	華監
高玉 碧晶	準教授
竹中 慶恒	華監
今井 慶紀	師範
葉柳 慶智	師範
久保 慶彩	師範
石野 慶裕	師範
上妻 慶雅	師範
山田 光楓	入門
クリス 星樹	初伝
早川 久仁子	
平井 さゆり	
鳴木 今日子	

3期

桑原 菜月	
和田 慶千	華老
小菅 慶節	家元補佐
阪本 慶純	家元補佐
林 慶妙	家元補佐
新井 慶珠	総目代
中村 慶典	総目代
足立 慶英	総目代
中西 慶由	目代
井内 慶君	総華監
大江 慶昌	華監
大江 星照	奥伝
大江 翠晶	初伝
古賀 慶和	華監
高橋 慶嘉	華監
稗田 慶智	華監
森 慶汐	師範
服部 慶晴	華監
伊藤 慶和	師範
中居 慶花	師範
東中川 慶智	華監
中岡 慶起	師範
掛水 慶恵	師範
鈴木 慶由	華監
村松 慶真	華監
須崎 慶詠	師範
下村 慶哲	師範
中野 慶里	師範
金子 慶和	師範
権 慶英	師範
木戸 慶由	師範
石原 慶真	師範
上野 慶理	師範
竹内 慶由	師範
小田部 慶綾	師範
奥田 彩波	準教授
岡田 清峰	会頭
大内 竹翠	中伝
水島 輝月	入門
竹林 青波	入門

花の芸術

- ・ 出品作写真
- ・ 花材名
- ・ 解説パネル

をご覧ください



『いけばなってなんだろう』 健一郎

いけばなってなんだろう。不思議な文化である。言ってしまうと、切り花を水の張った器に人が入れることをいう。何が人を夢中にさせるのだろうか。

この家に生まれたからだろうか。自分がしたいいけばなと、流祖の意見が合致している。この家でなければ、成人になっても生け花をしていなかっただろう。人に伝えるならなおさらである。個人的には流祖の意見を知りたのでたまに一緒だったと思ってるが、師の影響は多大である。家の影響だろう。自分の信条を曲げるつもりはない。その時に思った正解を間違いだと思つて、貫くつもりである。間違いに気がついたら修正すればいい。

いけばなについて調べなければ、こりについて調べればよい。今のいけばなと同じとは言わないが通じるころはあるだろう。いけばなは、仏教から起こったと言われているが、仏教発祥のインド、中国やベトナムなどのアジアの国であっても、いけばなに相当する文化は見当たらない。仏教の起こったインドでは植物は心を持たないものとされていたが中国の仏教で芽生え、日本で特に流行した「草木国土悉皆成仏（そうもくこくどしつかいじょうぶつ）」という草木や国土でさえ皆んなことごとく仏性があるので成仏しますという教えが広まった。いけばなは花を即身成仏させることなのだろうか。この土壌が他の仏教が布教された国では起こらなかった、いけばなが日

本で始まった理由の一つではないのかと考えている。学者ではないので正確なことは言えないが自分なりに調べて考えることは楽しい。

私は仏教の影響が大きいことに対して異論はないが、仏教を迎え入れるまでの日本の素地に興味がある。今日は二つの慣習について触れてみる。水口祭（みなくちまつり）と鳥総立て（とぶさたて）だ。

水口祭は稲作儀礼の一つだ。苗代に初を播く日に水口に土を盛り、季節の花や小枝を挿し、御神酒や焼米などを供え、山の神（田の神と同一視されている説もある）に豊作を祈る祭りだ。季節の草花である山吹や、ツツジなどの枝を畦に挿すという儀礼が残っている。

田の神に花を立てていたとも言えるだろう。依代としての「枝」である。人々は縄文時代に稲作が始まってからさまざまな形で豊作を祈り続けた。銅鐸稲作が始まり、どれくらい経ってからのことなのだろうか。いけばなが生まれた土壌として充分に考えられる。

農業を覚える以前のその日暮らしの生活から、稲作を覚え多すぎる恵みに戸惑いを覚えたのだろうか。森林や原野を開墾することは、野生の木、そしてそこに宿る神々や精霊は、人間に対して敵意をもつ恐ろしい存在と考えられていたらしい。

鳥総立ては万葉集で詩にも読まれた神事で、文字で残る最も古い風習らしい。これは長い時間をかけ大切に育まれた木を、造営に使用させて頂くことに感謝するもので、切株に梢を挿してその再生を願う風習だ。もちろん、今

も行われている。砂の物の正真の切り株の後ろからのぞく松にそっくりだ。鳥総立てもいけばなに影響をもたらしているのだろうと推測する。

林業も効率がよくなるにつれ伐採する量が増えた。多すぎる恵みは戸惑いを覚えさせ、人に神事を創らせたのだろうか。

ご飯を食べることは命をいただき、生きていく事、つまり身体を作ることである。

花を生けることは命をいただき、生きていく事、つまり精神を創ることであらうか。美しいと感じるのは人の心。各個人が花を美しくしているのだ。

人の数だけ美はあるが、共通点が多く、美しいとされるものに傾向はある。それが型と言われるものだろう。だがそれは一見、本質に見えるが全く本質ではない。本質を伝える際に型に変換しなければいけなかっただけである。一本の松をどう型に当てはめるか考えることは間違っている。その一本の松をどう生かすかである。

生物（なまもの）は美味しい。魚や野菜の生は格別に贅沢で味わい深く、瑞々しい。

生物（なまもの）とは、生（せい）のあるものである。生きていくものであるということだ。いけばなは他の芸術とは性質が異なるだろう。ドライにされた魚やトマトは味が濃縮されているが、生とは別物である。私個人としては干物も好きだが、やはり生のものは気持ちがよい。

自然のものは、何もしいままが美しいのか？それならばわざわざ切り取らなくてもよい。花を切った瞬間に生の輝きを植物はみせる。鉢から植物を切った時や、大きな木から切った時に感じる。その他大勢から、その一本に焦点が合うからだろうか。まだそれが何なのかは分からない。

お花を側に置きたいという気持ちが人にお花を生けさせたのだろうか。トマトを丸かじりすると美味しいが、輪切りにし、綺麗な皿にのせ、オリーブオイルと塩胡椒、モツアレラチーズを添えて食べると違った美味しさを味わうことができる。人の手が加わるということだ。

生けたお花を見て思う。自分は嬉しいが、花は嬉しいのか。みられることに喜びを感じて欲しい。花から直接返事をいただいたことはないが、気持ちよさそうにしているのを見ていて喜んでるように見える。

生き生きとしているものは美しい。美しく見えるものは洗練されている。シンプルであることは少し違う。数が多くても洗練されていると綺麗に見える。一本も、一つの葉も無駄な物がない事をいう。

そもそも植物の美しさに魅せられる一つの要因に植物の洗練された姿形があげられる。

お花に無駄な部分はない。問題はいつだって生け手にあるのだ。

美しいいけばなは、花と一体になり、そのものの魅力が引き出されている事をいう。大切なのは、その花、そして

花を慈しみ、対等に在るということである。技術自体は大したことはない。姿勢とその人の在り方が、そのままいけばなとして表れる。

グループホームで働いていてよく感じるが、対等であるということはないのほかに難しいことである。認知症の利用者さんも1人の人間なのですよ、敬いましょうと上司が人に言っていたが、1人の人間として敬おうとしている時点で、全くそう考えていないのは明々白々である。職員に対してと、利用者に対して対等な関係を築いているように見えた人をまだ1人しか見たことがない。皆んな真面目に働いている。誰も利用者さんの事を下に見ているつもりはないのだから態度として、言葉の端々に表れている。

花と人が同じ目線に立つことは想像以上に難しいことだ。花の取り合わせ、植物との接し方、枝捌き、水替え、言葉の端々に表れる。

生き物の命（人の時間を含む）を扱う者として肝に銘じておくこととする。

お花を生けるときは個性の尊重を何より大事にしている。最も気を使うところである。それぞれがそれぞれの個性を善い形で発揮できるように。

生きることが誰にでもできる。善く生きることが大切だ。とソクラテスは言った。お花を花瓶の中に生けることは誰でもできる。グループホームで働くことは誰でもできる。生き生きとした個性を引き出すことが大切なのである。今僕は花に夢中だ。

花伝書を見る

立花 藤除真
「藤の心」一歩子（富春軒・初版）
藤 松 檉 躑躅 栢植
小菊 鳶尾 若葉
（立花時勢粧・下 秘曲の図）



立花時勢粧「藤の真」

S 時に上へ伸びる藤蔓を真にした立花。「秘曲の図」の一つで、元は富春軒の作である。若々しい蔓の姿に藤の命を感じる。2色の躑躅で明るく彩りを増している。

仙溪

一歩子



仙溪が立花で立てた桜の大枝は家元宅の庭に。信楽焼の大壺にいけられた桜とレモンとメイ。
突然あらわれた桜の枝には、猫たちのほかにも時折小鳥がやってきます。



「花の芸術」展特設サイト
花展の様子をご覧ください。
kuwaharaseikei.net
下のQRコード
をスマートフォンで読み込んで
ください。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
5 月号
No. 707

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





白い花 菖蒲

△表紙の花▽ 仙溪

花材 花菖蒲 (菖蒲科)

花水木 (水木科)

花器 陶花器 (清水卯一作)

紫色の印象が強いからだろうか、白いハナシヨウブには特別感がある。

ハナシヨウブは野生のノハナシヨウブの園芸種だが、ノハナシヨウブは赤紫から青紫が多く、白花は極めて珍しいそうだ。森の中で水辺に白い花が咲いていたら、さぞ神秘的な光景だろう。いつか出逢ってみたい。

ハナミズキは北アメリカ原産でアメリカを代表する花木だ。明治時代に日本からソメイヨシノが送られ、その返礼に日本へやってきた。近年街中に多く植えられるようになり、桜の散った後も目を楽しませてくれる。好みの壺で、花の出逢いを楽しんだ。

ブラサダという蘭

△2頁の花▽ 櫻子

花材 クロトン2種 (燈台草科)

ブラサダ・オレンジ・デライト (蘭科)

花器 金属裝飾陶皿 (モロッコ)

長くて尖った花が珍しい蘭の「オレンジ・デライト」見惚れて暫くは食卓に飾った後、クロトンと一緒にいけてみた。

クロトンもカラフルできれいなものが多く、細葉や赤い葉脈がくつきりと目立ち、リュウノヒゲとかコブラと呼ばれる様な品種もあるくらい多様な形と柄がある。

どちらも長く日持ちしてくれただが、枯れていく姿も美しく、器を変えながらこの組み合わせを楽しんだ。

横から見た花の奥行





芍薬と太藺

△3頁の花▽ 健一郎

花材 太藺（蚊帳吊草科）

芍薬2種（牡丹科）

花器 ガラス花瓶

芍薬は咲いても綺麗だが、咲く直前に強い生命力を感じる。この芍薬に合うほどの数の太藺は料理の専門学校生が授業後、置いて帰ったお花である。芍薬と二種で生ける事になるとは思ってもみなかった。芍薬に負けない強さが出た。太藺の線の美を引き出すのはやはり難しい。投げ入れにすると水に浮くので剣山に生けている。

横から見た花の奥行





赤いスカビオサ

△4頁の花▽ 仙溪

花材 スカビオサ (忍冬科)
宿根スイートピー (豆

科)

夕霧草 (桔梗科)

花器 陶花器 (福本双紅作)

スカビオサは南ヨーロッパ、
アフリカ、アジア原産で、日本
のマツムシソウの仲間だ。マツ
ムシソウは薄紫色の花が咲く日
本の野草で山地の草原に育つ。
花の後にできる球状の膨らみ
が、僧侶が巡礼の時に持つ松虫
鉦に似ているところからこの名
がついたそうだ。

濃い赤色のスカビオサに白い
宿根スイートピーがよく似合
う。緑のユウギリソウは草原の
代わり。紫の宿根スイートピー
をアクセントに。

横から見た花の奥行





パイナップルの仲間

△5頁の花▽ 桜子

花材 オクロレウカ(菖蒲科)

黄花グロリオサ(百合科)

ネオレゲリア(パイ

ナップル科)

花器 ガラス鉢

オクロレウカとグロリオサだけでは平凡なのでパイナップルの仲間であるネオレゲリアを足元に添えた。黄色のグロリオサと一緒に飛び跳ねる様なかたちが可愛らしい。赤く染まっている部分も全て葉だが、まるで花の様にみえる。

熱帯アメリカ原産のネオレゲリアは手に入れてから2ヶ月にもなるが、部屋にいていても鮮やかで艶もあり生きているのがよくわかる。

木の上や岩盤などにくっついて生活する着生植物なので、根は退化していて水を吸い上げない。水は葉の中心部に霧吹きして鑑賞している。





立派な円錐形

△6頁の花▽ 仙溪

花材 柏葉紫陽花(紫陽花科)
芍薬(牡丹科)

花器 陶花器

カシワバアジサイは北アメリカ原産。花が円錐状につく。鉢で育てているが毎年花を咲かせる逞しい花だ。赤いシャクヤクと黒い器にシンプルに。



レモンはオンライン講習に参加。メイは庭の探検中。





躑躅の生花

△7頁の花▽ 健一郎

花型 草型 副流し

花材 霧島躑躅（躑躅科）

花器 白竹竹筒

無性にお生花をしたくなる時がある。僕の場合は大抵、美味しいお酒を飲んだ後である。お昼に外で食事をした帰りに、生花の得意な師範の方と御所の前で偶然出会った。二人で御所の中を歩き楽しみ、その足で花を求め、自宅へ。お互い納得がいくまで自分の躑躅と向き合った。お互いがそれぞれに大切にしている事、が手に取るようにわかる。共に花を生ける友を得た良い1日であった。

横から見た花の奥行





足を伸ばして高千穂峡（宮崎県）へ。

肥後で生まれた6つの花
椿、芍薬、花菖蒲、
朝顔、菊、山茶花。
（水前寺公園にあった説明板）



日本いけばな芸術九州展
熊本鶴屋百貨店
4月13日（水）～18日（日）
桑原仙溪
石楠花 松 桜苔木
器…水の平焼
龍が持つ玉のような器は
熊本の水の平焼で、熊本
の伝統工芸とのコラボと

して、京都から花と敷
板を持参していた。
熊本地震から6年が
経つ。崩れたお城も天
守閣は昨年から見学を
再開。花展にも多くの
来場があった。歴史の
誇りや文化の力が人の
心の支えになっている。



京都東山花灯路 2022 後期展 3月9日～13日 法観寺前
桑原仙溪 花：連翹 器：陶花器（竹内眞三郎）



京都東山花灯路 現代いけばな展
3月9日～13日 円山公園
桑原健一郎 3瓶飾り
木瓜、黄梅、椿
器：竹内眞三郎



京都新世代 野外いけばな展
～私の印象～
2月11日～13日 堂本印象美術館庭園
桑原健一郎 二株立花
満作、小手毬、木瓜、牡丹、椿、
枯向日葵の茎、枯物花材
器：市川博一

第73回 華道京展 く花と遊ぶく

会期 4月7日(木)～12日(火)

会場 大丸ミュージアム(東京都)

コロナウィルス感染拡大の影響により2年前には中止、昨年は

二条城の野外展示に切り替えたので、大丸での開催は3年振りとなった。各期最終日は3時閉場にしたが、6日間で7千人を超える来場があった。

いけこみ時のリスクを減らした

めに前期と後期で出品流派を変えたり、いけこみを2部制にしたりと、今までと違うこともかえって新鮮で、工夫しながら前へ進むことの大切さを改めて感じている。



蘭の立花 バンダ、オンシジウム、サンセベリアほか 器：瓷器 木村展之
藤、板屋名月、躑躅 器：陶花器 竹内眞三郎



エピデンドラム、ビバーナム、葉桜 器：ギヤマン・ガラス鉢
桜の生花 器：方形陶花器 富永脩



駅 de 華道、書道と茶道 3/12・13 京都駅前広場 展示 桑原仙溪ほか 体験イベントは中止

『使い回わしの読書感想文』

健一郎

中学の恩師が流展にいらした。「私はこの先生には特別に目をかけてもらっていた。」と皆が思うような先生で今も活躍なさっている。何かあれば土曜日であろうと日曜日であろうと指導を熱心にくれる先生だった。ダメなことはダメ。生徒同士の噂にも敏感で何かあれば自分のことのように祝福してくれる。体が弱いのに、人一倍動き、気も常に使っている。身を粉にして働いているようにも見えるのだが、全くそれを感じさせないのだ。心理的にも、物理的にも人の痛み、喜びを受け入れ、導く人であった。

先生は一人一人を見て生かすことが得意だったように思う。一人一人を特別に見ていた。生徒の特技を引き出す場を設けるのが上手だった。カナダの留学生の前で日本の文化の紹介をするというところで和室で裏白の木のお生花をいける大きな場をいただいた。デモンストレーションを経験させてもらった14才の夏だった。枝を撓める度にでた嫌な汗を鮮明に覚えている。先生は特別な場を作ることとしたが、日常的に人を生かしていたのだから驚きだ。

流展の会場でお互いの安否の

確認が終わると、先生からすぐに、このテキストの文章を褒めていただいた。「君に文章の才能があったとは知らなかったわ。」とのことである。国語の先生に褒められたのではなく存在を褒めていただいたような言葉に感じた。元来文章を書くことが大の苦手であった。言いにくい事がなかったということだろうか。夏休みの読書感想文は、中学一年生の時に祖父に書いてもらった。毎日読書感想文を書いたような人である。原稿用紙を奪われる形で本人は楽しそうに書いていた。その後、中学一年生に書いてもらった感想文を高校の卒業まで書き写し提出していた。6年間自分のしたいことに時間をつかえた有意義な夏休みを過ごしていた。

中高時代に自分で書いた文章と言え、その場で恩師の先生に言われ書かされた反省文ぐらゐのことである。学生時代は運動と遊びが一番で勉強に割く時間なんてものはなかった。自分でも驚くが、今は読みただけの本を読み、毎日のように貯めたい言葉に出会い、保存して、このテキストの場で好きなことを言っている。毎月言いたいことが溢れ出てくるのだから不思議だ。今も変わらず、したくないことは適当に誤魔化しながらしたい事ができる環境を作っている。わがままなだけである。言い換えると生き生きとしているのだらう。

読書感想文を使い回していいことを先生に告げた。「全く気づかへなかったわ。それも一つの才能やね。」とおっしゃった。

いけばなにおいても型とはよくできたもので、型通りにいければ綺麗に見える。型通りに入っているのに植物が魅力的に見える花は植物の魅力でなく型に心を奪われていることが大半だ。世の中のほとんどのいけばながそうであると思っている。魅力が見えない人に魅力の引き出し方を伝えられるはずがない。ある師範のお弟子さんが言っていた。「先生、お生花の型に当てはめる事ができたら、見た事もないような植物でもいける事ができるのでしょうか？」僕は、型から入るいけばなは植物の魅力を最大限に引き出すことはできないだろうと答えた。ただ書き写しただけの軽い読書感想文が頭に浮かんでいった。「先生は真面目で誠実ですね」と返事が返ってきたが、いけばなはかつての読書感想文ではない。

理屈さえ把握すればどんな花でも生ける事ができる。これは、型の使い回しである。本当に好きだったのなら、その植物ごとの個性を大事にし、引き出すところだろう。自分のお弟子さんにそんな事を教え始めて4年ほどたった。型はまだ教えて

ていない。彼、彼女らは魅力を引き出そうと懸命だ。セオリー通りではない、驚くような方法で植物を魅せてくれる。最近ではお稽古をしていて私が楽しまされているような気がしている。

型に当てはめて、要領よく書かれては困る。使い回しの読書感想文があると知った僕は、それを見つけた時に指導することができるだろうか。想いの込められた物とそうで無いものを見分けるのは両方経験したからである。

型に当てはめるだけのものは戦前、戦後に爆発的ないけばなの拡大が見られた時代には適していた。簡単にお花を生けられるようになり、お免状が求められていたからである。今、僕が人に伝えたいのは、花と向き合う楽しさ、花の魅力の引き出し方である。使いまわされた読書感想文ではない。今のところ僕のお弟子さんは何文字ぐらいいだろうか。相当な文量を熱心に教場で書いている。

生花と立花の古典に関しては花の魅力を十分に引き出せるようになってから型を習うのがその人の花をいけるための道だと今は考えている。

料理の専門学校で副家元がいけばなの授業を担当している。いけばなの授業を楽しみにして

くれている人もあるが、なぜ料理以外の事をしなければいけないのだろう、と疑問を持つ人もあるようである。初回の授業で花に触れる前に持ち帰るよう伝え、家に飾る場所がない、家まで遠いなど理由を探す。花に触れた後の表情は変わり、授業後、家の玄関に一輪だけ飾りたいです。トイレは可愛そうですかね？家までお花を持たせる方法は何かありますか？と質問攻めである。授業を重ねる度にそんな人が増えるのが楽しみだ。

お弟子さん、生徒さんのあるがままの状態を受け入れ、そこから一人一人がそれぞれしたいことができるためのお手伝いをする。それは子供のいけばなでも、グループホームでのケアでもあっても、変わらない一つの僕の背骨である。

多忙であろうに、疲労感を隠しながら先生は、最高の作り笑いをしてくれた。5分ほどしか話してはなかったはずだが、その5分はゆつたりとした時間でアルバムを見ているようだった。来て下さった事に対する感謝と、このタイミングで会えた事が今の自分を見つめ直すきっかけになりました。これからしたい事を好き放題にやっていきます。ご来場くださりありがとうございます。お元気で。

草花

花伝書を見る

立花 芦除真

「草花」僧光清（富春軒・初版）

芦 薄 百合 芍薬 杜若 小菊

熊笹 紫苑 著我

（立花時勢粧・下 秘曲の図）



草花主体の立花である。葉を広げ茎を伸ばし花を咲かせる草花たち。自然の息吹を見つめる眼差しを感じる。

花をいけるのは、和歌や俳句や詩に自然の輝きを詠みこむのに似

ている。肝心なのは輝きを感じる心。富春軒のいける花はどの花もキラキラ輝いている。

仙溪

僧光清



楓

△12頁の花▽ 健一郎

花材 花菖蒲（はなしょうぶ 菖蒲科）
いろは紅葉（いろはもみぢ 楓科）

花器 陶花器

桜の季節に少し遅れて楓の花が満開になる。楓の花が集める大量の虫は春の終わりの知らせだと思っている。楓の下に僕もよく行く。だが、あまりの虫の多さに退いてしまう。花の盛りが終わってやつと私が楓を味わう番である。花菖蒲の季節にもなると花は終わり写真のようにしっかりとした葉になっている。そりかえった枝なので葉を前面に見せて生けた。どつしりとした器に花菖蒲とよく似合っている。私の大好きな季節である。

横から見た花の奥行



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
6 月号
No. 708

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





八角蓮の花

△表紙の花▽ 健一郎

花材 金鎖(豆科)

八角蓮(目木科)

花器 青白花瓶(吉川充作)

虫が好みそうな香り、人が苦手とする匂いがした。足元を見ると八角蓮の葉が光っている。よく見てみるとお花が咲いていた。花の珍しさとその匂いで人を惹きつけていた。八角蓮の相手を探しているとお花屋さんからキンクサリがありますとのこと。よく合う取り合わせだと思っている。格調高く仕上がった。獣足の花器はインド系の神様を想起させる。



流木を使う

△2頁の花▽ 仙溪

花材 裏白の木(薔薇科)

躑躅(躑躅科)

鉄線2色(金鳳花科)

流木



花器 銅立花瓶

流木に足をつけて器にさしておき、季節の木や花を加えて自然な景色をつくってみた。流木の重みにつりあった安定の良い銅器にいける。



たっぷりと

△3頁の花▽ 櫻子

花材 花菖蒲はなしょうぶ（菖蒲科）
撫子なでしこ（撫子科）

花器 カットガラス鉢

縁あって沢山の花菖蒲がやってきたので、大きなガラス鉢にたっぷりといけて玄関に飾った。四方から見えることを意識していけている。どの花も一斉に咲いてくれて感謝。





べつこうまさき
鼈甲柁木の生花

△4頁の花▽ 仙溪

花型 行型

花材 べつこうまさき
鼈甲柁木

花器 すすだけ
煤竹竹筒

マサキは常緑低木で日本列島に広く分布している。葉の大小、葉色やその濃淡、斑入りなどいくつかの品種がある。

マサキ、オオサカベッコウマサキ、キンマサキ、ナカフキンマサキ、ギンマサキ、オウゴンマサキなどが緑化植物として公園に植えられたり生け垣に使われている。

いけばなではクロヒメマサキやベッコウマサキを生花にしているが、ベッコウマサキは明るい緑と黄色が美しいので、生花にいたった残り枝を盛花や投入、一輪挿しに利用できる。

写真のベッコウマサキは伸びた細枝を生かしてつけたが、手にした枝にボリュームがあるなら、それを生かせばいい。





ピュアホルン

△5頁の花▽ 仙溪

花型 真型 二種挿し

花材 鉄砲百合(百合科)

スプレー薔薇(薔薇科)

花器 陶水盤(伊藤典哲作)

4月に稽古の見本でいけたものだが、ユリの季節の生花として参考に記載しておく。

テッポウユリを真、見越、真囲、副、胴に立て、スプレーバラを留と控に加えた。

ユリはピュアホルンという品種で、よく締まった葉がびっしりつき、小ぶりの花はとても良い香りがした。ユリもバラも撓めずにいけている。剣山にさす位置を工夫して、足元をできるだけ細く見せている。

蕾の時の姿は先月号のレモンちゃんの写真で見てもらえる。花が咲きそろったあと茶色く枯れるまで、葉はずっと美しかった。



一輪挿し

△6頁の花▽ 健一郎

花材 小鬼百合（百合科）

金虎の尾（金虎の尾科）

花器 陶花瓶（崔龍熙作）

お花屋さんには茶花用に鉢で珍しい花が置いてある。それを眺めているのが好きだが、生けるとなると相手を探すのが難しい。今回似合いの2鉢を見つけた。いい季節である。魅せたいものが写っている。



花の勢い

△7頁の花▽ 健一郎

花材 黄素馨（木犀科）

アリウム・ギガンチウム（百合科）

ム（百合科）

紅花（菊科）

花器 陶花瓶

ギガンチウムと紅花の花の形





に目がいく。似た形の花を取り
合わせると形の違いに目がいか
なくなる。その質感の違いをみ
ることができないだろうか。似
た植物による調和ではなく競い
合っている様に私は感じてい
る。ベニバナとソケイで生ける
予定だったがギガンチウムが入
ると勢いが増した。夏の匂いが
する。



レモンが注意してくれてるの
か、花にいたずらしなくなっ
てきたメイちゃんです。



草花砂之物草

花伝書を見る

砂の物 檜扇のましん除真

「草花砂之物草」

中野氏（富春軒・初版）

檜扇ひおうぎ 荳若かまつばた 仙翁花せんおう 百合

擬宝珠ぎぼし 小菊 桔梗ききやう

（立花時勢粧・下 秘曲の図）

立花時勢粧の百十八ある絵図の一番最後、トリを飾る一作。見開きで掲載されているので、生き生きとした躍動感を感じ取ることができる。

この絵図の主役は草花で、植物の澁刺はっしとした生命力を表現しようとした富春軒仙溪の心が読みとれる。

右へ大きく弧を描きながら伸びる葉は何の葉だろう。ススキのようにも見えるが、葉の下にやはり長く伸びた茎の先に力キツバタの蕾が描かれていることからすると、この長い

葉も力キツバタの葉ではないだろうか。

池のほとりで雨風に倒れた力キツバタの花と葉が、思いのほか長く伸びていて、それをなんとか生かしたい一心でこの砂の物を立てたのだろう。厳しい環境にあらがう植物の姿を美しいと感じ、魅了されていたのだと思う。

「二瓶の内に一枝風流なれば、ほかこれにあらそいて働きあり。」と「砂の物草の花形」で述べている。

普通は上に伸びる葉が水面を飛び越えんばかりに横へ伸びる。その姿にヒオウギやユリが絶妙なバランスで配されている。左下に横倒しに育ったユリがグイッと上を向いている。よくこんな咲き方を見つけてきたものと感心する。砂鉢すなばちの装飾までが渾然こんぜん一体となつている。

仙溪

中野氏





『義祖母との散歩』

健一郎

隠居して山に暮らしたいとふとした時に思う。隠居生活の先輩である祖父のお宅に遊びにいった。山に囲まれた家から見下ろすと川が流れている。楓が目を引く。その足元には躑躅が咲いており、大きな台風が来る前までは藤の花が一面に咲いていたそう。ゆつたりと川の音が生活の中にある。山の香りを楽しんでいると、川の上流へ向かうよう、カワセミが驚くほどの速度で通り過ぎた。義祖母によるとしよつちゆう遊びに来るそう。昼から肉が大好きな義祖父と競うようにすぎ焼きを食べ、妻と義祖父は川の音を聞きながらウトウトと昼寝。私と義祖母は山へ散歩する。数十秒歩けば森の中。外来種の植物を薙ぎ倒し、大きな枝、大きな石を端へどかしながら、やわらかく歩いていく。

その光景が後から見ている僕には、山を整えているように見えた。義祖母が山の一部であるようだ。鳥が蜜を運ぶがごとく自然な行為にみえた。それは僕が人だからであろうか。人でも

くともそう感じられるのではないかと感じている。自然と人との付き合いは長い。原始的であればあるほど濃密な付き合いがあった。家にお米が届く現場さえ見ていない僕は自然との付き合いが非常に薄い例だろう。

都市において整えるとは自然物をなくすこと。人の住む街にすること。西洋の庭園に見られるような人工的な幾何学的な形を楽しむ庭園と比べ、日本の庭園は自然美を表す。いけばなおいても、個人的に好きではないが、人の解釈にあてはめた幾何学的特徴に着目して楽しむ物と、植物そのものの魅力に着目して楽しむものがある。いずれの場合であってもそれは自然そのままだではない。「手入れ」とはそういうことである。人は自然を看る(世話をする)事によって、返って自然を内から従わせる特徴を持つとも言える。

都市化された環境に慣れた人の原則として都市の中に自然を置くことを酷く嫌う。ここでの自然は手入れされていないありのままの野生である。昆虫がいて驚き、土が見えていてと驚く。日常の髭剃りや、化粧も自然からの距離のとり方の一つで

ある。全てが人によって意識的に作られたもののなかで生活している。テーブルマナーもこの視点で見ると面白い。街路樹や庭は人が看ることで管理されている。死体があると驚く。人の死は人から遠ざけられる。死ぬ前に病気で病院に隔離、亡くなると大急ぎで火葬場に行き。そんな環境で育った人達に死生観をもていつても妄想でしかない。

いけばなは芸術の中でも自然との関わりを思い出させてくれる。都市化する前のヒトに返す装置としてあり続けるのかもしれない。その時間が大切である。整理整頓された無機質な部屋に花を置くときの空気が変わる。生き物としての安心感がそこにある。

義祖母は立派な杉の木に手を合わせ拝む。僕も御所にお気に入りの楠木があるのだが、それは拝む対象ではなく、友達のような感覚でいる。木に登り、寝転ぶ。幼い頃は楓の木に登り、寝る時を過ごしていた。圧倒されるような木を見つけると立ち尽くす。撫でたくなる時も、抱く時もある。記憶している初めの木登りはスイスのジュネーブでの

木登りだった。当時幼稚園児だった僕より年上の子供が登っているのを見て自分も登りたくなったのを覚えている。一面、緑の芝生が整えられていて、木が綺麗に見えた。家の近くの公園では地面が砂だったからか、木の幹にジュネーブほどの魅力を感じなかったのだろうか。母いわく「あんたはサルみたいやつたで」と。よつぽど木登りが上手だったのだろう。上手な例えである。木と自分の関係は少しづつ変わっている。今でもよく木に登ることはあるが、ここ最近、手をかざしたり、抱くという行為が追加された。木を味わうというのだろうか話を聞くと感覚に近い。触診とも似ているが少し違う。木と戯れ合う時もあれば共に時を過ごす時もある。拝む行為は木がある感謝の念がそうさせたのだろうか。

自分が歳を重ねた時、手を合わせられるような木が見つけれられるだろうか。木ではなく自分の在り方による物だと考えている。義祖母を見ていると感謝の気持ちが体表へ溢れ出ているようだ。まだまだ背中中は遠い。

義祖母は話しながら慣れた手つき、足取りで山の中へ入っ

ていく。妻の兄妹は幼少期この山で育ったそうである。オランウータンに似ているとは思っていたが合点がいった。最近、義祖母は口笛を吹きながら歩くそう。ウグイスの鳴き真似を2人でしながら川に沿って散歩。口笛の音にウグイスが返事してくる。山の中には僕たち以外に人はいない。ある程度中へ入ると風合いが変わった鳴き声が聞こえた。「ここからは別の鳥の縄張りです。」と案内してくれた。モズの縄張りだ。様々な鳴き真似で遊んでくれる。モズは他の鳥の鳴き真似をする面白い鳥だ。僕が続いて鳴き真似をすると、また違う鳴き方で先導してくれる。様々な鳴き声で遊んだ。足元を見ると茶色のカエルが川の水を浴びながら羽虫を食べている。「昔は蛇がいてんけど。」と義祖母、なるほどこのカエルは平和に慣れていそうな体たらくなわけだ。整えられた道を除けばそこには自然が広がっていた。この自然の中では僕はとても定住できそうにはない。たまに遊びにくるくらいがちょうどいいのだろう。義祖母と僕の事をウグイスが家に帰るまで見送ってくれた。僕と自然の距離である。

大和学園 情報誌

クラブ・ドラッシュ 4月号

く若き第一人者に教わる
京の伝統文化・いけばな

桑原専慶流次期家元

桑原健一郎さん

「縁あってお会いする方とお花に向きあい、四季折々に咲く花々の魅力を活かしていれば、自分自身の魅力も磨かれるようです」

桑原専慶流の歴史は元禄時代（17世紀）に始まり、初代仙溪が当時の植物学を駆使した全8巻の著作は、華道の言葉が初めて記された資料とされています。そのような流祖から伝わる理知的な気風と自由闊達さを受け継ぎ、十六代（次期）仙溪となる立場の私ではありますが、日々「い



ばな」とはなにかを自問しているのも事実です。但し見つけた私論もあります。それは縁あってお会いする方々が安らいでくださるために、それは四季折々の野山に咲く花々が宿す「いのち」のために、お花の魅力を最大限に活かすことで、自分自身も活かすのが桑原専慶流の「いけばな」ではないかということ。また、そのような気持ちで花々に向きあっていれば人は自ずと磨かれるよう。「いけばな」に勤しみ、人としての魅力を増されたお弟子さんは少なくありません。これは他者への「おもてなし」を学び、自分を活かそうとされている大和学園の皆さんも同じでしょう。今後人も人としての魅力を高め続け、京の伝統文化でもある「おもてなし」の担い手となれる将来に向けて、私たちの「いけばな」が一助になることを願っています。（以上、誌面より転載）

学校法人大和学園は京都市内に4つの専門学校（調理師専門学校ほか）を設置するほか、生涯学習や産業支援事業も行っている。現在、華道の授業を櫻子副家元が担当し、健一郎次期家元も助手を務めている。



クルクマ

△12頁の花▽ 仙溪

花材 クルクマ・シャローム

（生姜科）

透かし百合（百合科）

モンスセラ（里芋科）

花器 陶花器

クルクマは夏のいけばなに重宝する。インドやタイの熱帯の花なので暑さに強い。ハスの花のようなものからタテに長く積み重なったものまで種類も多い。花を守る白やピンクの包葉が美しい。子供を護るお母さんのような花だ。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
7 月号
No. 709

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





檜扇
ひおうぎ

△2頁の花▽ 仙溪

花型 生花^{せいけ} 株分け
花材 檜扇^{あやめ} (菖蒲科)
花器 陶水盤

古来その姿と漆黒の実によって烏扇^{からすおうぎ}と呼ばれ、扇^{あお}ぐ風で疫病を退散させた。檜扇と呼ぶ今も祇園祭には疫病退散の願いをこめていけられている。今年は3年ぶりに山鉾巡行が行われる。



ヒオウギの実
(ヌバタマ)

<https://beyond-ecophobia.com/belamcanda-chinensis/amp/>



上から見た奥行



トルコ桔梗 ききよう なでしこ 撫子

△3頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 トルコ桔梗 (竜胆科)

美女撫子 (撫子科)

花器 陶水盤

手毬のような花はビジョナデシコで、ヨーロッパロシア西部に自生する多年草。ヒゲナデシコとも、何故かアメリカカナデシコとも呼ばれる。トルコキキョウはアメリカ原産。これらを株分けでいけて床の間に飾り、ブルーが鮮やかなトルコの細密画を掛けた。

この花たちのように世界の国どうしがより良い関係を築けますように。





おとぎ話のような

△4頁の花▽ 桜子

花材 デルフィンニウム

(金鳳花科)

茴香 (芹科)

カンパニュラ (桔梗科)

花器 陶花瓶 (フランス製)

この立派なデルフィンニウムの故郷はヨーロッパから中央アジアにかけての山岳地帯だそう。冷涼な高地の草原湿地に咲く姿はさぞ幻想的だろう。

地中海沿岸原産のウイキョウとカンパニュラを合わせ、金の三日月模様の器にかけた。不思議な花たちが咲くおとぎ話のようにならないかなった。





ニューサイラン

△5頁の花▽ 仙溪

花材 ニューサイラン2種

(竜舌蘭科)

鉄砲百合(百合科)

トルコ桔梗(竜胆科)

花器 陶水盤(伊藤典哲作)

びわ湖大津館イングリッシュガーデンでニューサイランの花を見つけた。真っ直ぐに伸びて、天に昇らんとする龍のようだ。いける時も葉の勢いを生かしたい。



⑥チョコレート色の蕾。
⑦ニューサイランの株。

笹百合

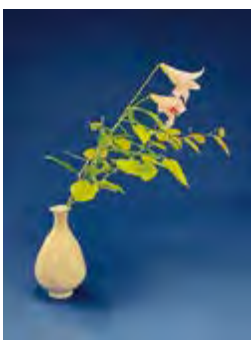
△6頁の花▽ 健一郎

花材 笹百合(百合科)
土佐水木(満作科)

花器 白釉陶花器(崔龍熙作)

夏にならないと百合は生けない。年中花屋に置かれているが、生活の景色とあまりにもかけ離れすぎていて季節以外の百合に対して強い違和感を持っている。

栽培されている花の場合、花屋に並ぶ時期が早いことがあるが、できるだけその時の花をその時に生けるようにしている。いつも今の季節を楽しんでいる。この笹百合と取り合わせたのは生けた季節に飛び切り綺麗だった土佐水木。気に入っている器に生けた。



初夏の砂物

△7頁の花▽ 健一郎



花型 砂の物
花材 花菖蒲 (あやめ
の かんぞう)

野萱草 (百合科)

太蘭 (蚊帳吊草科)

蜜袋 (桔梗科)

土佐水木 (満作科)

河骨 (睡蓮科)

擬宝珠 (百合科) 晒木

花器 陶砂鉢

この花を撮影した次の日に妻と蜜を見に行った。

この立花を見るとさまざまな事を思い出す。子供のいけばなや学生達と生けたフトイ、妻と見に行った花菖蒲、蜜の側で咲いていた蜜袋、滋賀の平地付近で見た野萱草、河骨は今年初めて自分の稽古で生けることになった。花屋さん、産地の農家さんの協力があったのである。全て今年の体験である。

少しずつその花のイメージが強くなっていく。面白い砂物が出来上がった。



『お花の倫理』

（復興いけばな宣言）』

健一郎

倫理とは「人として守り行うべき道」とある。

人は変わり続ける。すると倫理も変わり続けるだろう。26年ほどみてきたが、その時間だけでも倫理の移り変わりを眺めていて興味深く感じている。

近頃イルカショーの廃止のニュースが流れていた。楽しみにしていたのに残念だとの事。古代エジプト、中世のヨーロッパの頃から王侯貴族が、戦利品として収集し動物を持ち帰って見せたのがサーカスの始まりとされている。獅子は王と共に描かれていたのを目にする。程なくしてサーカスが誕生し楽しまれてきた。家畜化にも成功し、人は増えた。家畜の在り方など人と動物の関係が見直されるようになり久しい。人が広い視野を獲得していくたびに倫理は上書きされていく。今動物と人間の関係がもう一度見直しされようとしている。

学生時代、北海道の登別の熊

牧場で熊に向かつて魚を投げる事ができなかった。周りの観光客は、可愛いといい、熊の群れに向かつて上から魚を口へめがけて投げて喜んでゐる。口から外れた魚には見向きもしない。私は餌の購入を拒否したが、同伴していた友人が一つ魚を分けてくれた。人が動物へ魚を与えろという図式をまざまざと見せつけられた様な気分だ。数メートル離れた熊に魚を遠くへ投げ、歩くよう促すが、口に上手に投げられた魚しか口にしない。もちろん、熊牧場は餌やり体験で観光客を惹きつけているのだが、熊の研究、保護、観察、熊と人の共生するための方法を知るために始まり、今でもそれは変わらない。餌やり体験で人が惹きつけられることが個人的に情けなく思っている。

こどものいけばなでフトイ、バラ、ナルコユリでお稽古をした。好奇心の強い彼はフトイを曲げて剣山に刺していた。母親は私の顔を見て申し訳なさそうな表情をしているが彼を見守っている。母親曰く、他流派のお花でその様なお花があり、やってみたのだそうだ。私は彼に聞いてみた。「薔薇は曲げなかつ

たのですか？」可哀想だから曲げないとのこと。フトイは可哀想ではないのかと尋ねると可哀想だと言う。好奇心でお花に対して失礼なことをしてしまったのだと落ち込んでいた。無意識でなく、意識的に人が変わることで自分を変えることについて話した。先生の前の自分と母親の前の自分。ちよつかいを出している相手と出していない相手の違い。彼はいじめの問題も無意識な決めつけが原因であるとの結論に至った。それが合っているかはともかく、考えることが大切だと感じている。

推察するに、彼は自分と向き合っていたのだろう。そして僕は花と向き合うことを伝えたいと、再認識した。だがそれはその花の向こう側の自分と向き合っているのかもしれないとも考えている。

芸術の世界ではオリジナリティが大切だとされる。自分を出そうとする事は自然な事だが、私は、無理して作ったオリジナルだと主張する作品の浅薄さがいけばなに限らず苦手だ。いけばなの場合においても、無理せず、そのままだがよい。同じ

思いを持った人がいたとしても個人の差は表出する。花が一本一本違うからだ。同じ作品に見えたとしたらそれは見る人の力量不足だ。各個人が感じた花の魅力を引き出すのは人である。

動植物をかわいといい愛でている人はよく見かけるが、可愛がることとその生き物がいい状態であるかは全く別の話である。私はいい状態である事を前提としている。可愛らしいフトイを折り曲げることはフトイにとっていい状態ではないし、過度に撫でられすぎた犬はストレスを抱えている。

生ける花として花がある場合に、葉の一枚、枝の線までに魅力を感じ、その姿を生かきするいけばなを伝えたい。

切花になった時点で花は死んでいるので何をしてもいいと考え、シンプルな葉、茎を面白くしようとすると人らしさを花で引き出そうとするのは好みでない。過度に人の目を気にしてお花を生けてほしくない。過度な傾倒は大切なものを見えなくさせる。花の気持ちを考えて、その人の個性を大いに尊重してそ

の人が大いに楽しむいけばな。植物をおり曲げたり、花を触る人が自由にすればするほど、植物は苦しそうだ。生き物の命を使って自己表現しなければならぬほど人は特別なのかと疑問を持っている。

生活に必要なため行われる利用や、飾る花としての利用に関しては、脈々と人の中で続いてほしい別の文化である。

曾祖父の13世家元は新興生け花宣言を呈したうちの一人であるが、著書『いけばなの四季』で創作的な造形をいけばなとは明確に区別している。伝統的ないけばなや、現代的な盛花瓶花と創作的造形を混同することがいけばなよくないことであると著されている。

13世家元に会ったことはないのだが、本を通して、熱量のある主張や、写真に残っている花や造形作品を通して魅力を感じている。13世家元のお弟子さんに話を伺うと人となりが少しずつつ浮かび上がってくる。古い本ではあるが、読みこたえ十分で、今の時代に読んでも面白いことに驚く。

（つづく）

荷葉一色

花伝書を見る

立花 荷葉（蓮）一色

桑原次郎兵衛

蓮

（立花時勢粧・下 秘曲の図）

28本の花・実・葉・巻葉が渾然一体となっている。この立花を立てた桑原次郎兵衛は初版において富春軒36作に次ぐ16作の絵図がある。富春軒が自然の面白みに寄り添う感じな

のに対して、次郎兵衛は自然の造形の組みあわせを楽しんでいる感じがする。自然体の富春軒と攻めの次郎兵衛。二人はどんな関係なのだろう。



桑原次郎兵衛

流展の立花時勢粧解説
パネルで作者と作品数
に間違いがありました
ので訂正します。

正…富春軒仙溪 18（36）



可愛らしい。葉の質感がそう
思わせるのだろうか、生えて
いる様だろうか。小さな花から
だろうか。切り花になった際の
儚さだろうか。個人的には水生
植物の中で一番自分に近い波長
を感じるからだろうか。水を見
せるべく小さなガラスの器に一
種で生けた。

花型 生花 行型
花材 河骨（睡蓮科）
花器 ガラス花器（コスタボ
ダ）

河骨の生花

△表紙の花▽ 健一郎



薔薇の生花（写真⑤）

健一郎

薔薇の枝振りが好きなの
で、枝振りを見せやすいお生
花の様式を借りて生けた。暴
れた薔薇を手当たり次第に
貫つたのはいいが、生けるの
に一苦労する。生かすのが難

しいが、そのものの良さを引
き出せたと思う。器は薔薇の
歴史を感じさせるような小川
欣二さんのものを。奥田薔薇
園さんの薔薇は香りが良く、
幾度嗅いだかわからない。香
る赤い薔薇は珍しいとのこと。
1ヶ月後の今も蕾が咲き
部屋で楽しんでいる。

「花の芸術2022」作品集

立花時勢粧解説付き

A4版 128頁

3300円（税込）

立花時勢粧333年、「花の芸術」
桑原専慶流いけばな展の作品集を
つくりました。

ご希望の方は家元事務局へ。



（075 221 2950）



水辺の二友

△12頁の花▽ 健一郎

花材 花菖蒲（菖蒲科）
河骨（睡蓮科）

花器 手付八角銅花器

花菖蒲と河骨。お生花で取り

合わせても良いが、一輪ずつ勢いのあるものを出逢わせた。小品の花ではあるが、手つきの銅の器が品よく合っている。



メイちゃんは木登りが大好き。でも下りられず助けを呼びます。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
8 月号
No. 710

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



源為朝

みなものためとも
△2頁の花▽ 櫻子

花材 作百合(百合科)
唐糸草(薔薇科)

桔梗(桔梗科)

花器 陶花器(清水保孝作)

源為朝は平安時代末期の武将で、頼朝・義経兄弟の叔父にあたる。身長2mを超す豪傑で、九州・琉球・京都・伊豆諸島などに多くの伝説がある。

琉球のテップウユリ、伊豆諸島のサクユリ、そして京都ではヤマユリ(の変種?)がそれぞれ為朝百合と呼ばれている。

蕾で買ったタメトモユリは赤い斑点の無いサクユリだった。写真で見たことはあるがいけるのは初めて。源為朝の伊豆での勇姿を想像して楽しんでいる。



サクユリ



ヤマユリ





夏のいけばな

△5頁の花▽ 健一郎

花材 アナナス

(パイナップル科)

ドラセナ・コンシンネ

(リュウゼツラン科)

アンズリウム

(里芋科)

花器 紺色ガラス水盤

年中あるが冬には魅力の感じ
なかつた花だが夏になると心な
しかきれいに感じる。私は熱帯
の暑さと京都の暑さの違いを比
べられないのだが、植物園の温
室なんかで想像を膨らませてい
る。とはいっても植物園も現地
の音を出したりしてくれている
ので疑似的ではあるが体験でき
ることはありがたいことであ
る。植物の勢いをそのままに生
けた。アナナスの立ち姿ではな
く、咲いている花を見せたかつ
たので大きく前へ倒した。重た
かったため、鉢を後へおいてい
る。京都にいながら熱帯の雰囲気
を味わえるのはいいものだ。
興味へのきつかけとなる。そし
てそれは歳を重ねると記憶や、
思い出としてそこにあるだろ
う。

夏の夜空

△4頁の花▽ 仙溪

花材 サンダーソニア

(百合科)

オーニソガラム

(百合科)

ネオレゲリア

(パイナップル科)

ピットスボラム

(海桐花科)

花器 陶コンボート

竹と紙で作られた小さな気球が夜空に昇って行く。天燈^{てんとう}は昔の夜の通信手段だったものが、無病息災を祈る民族習慣となり今に伝わるそう。サンダーソニアは南アフリカ原産だが、花の姿からチャイニーズランタンリリーとも呼ばれる。

夏の夜空をイメージして、他に星の形をした花や葉を持つものを3種組みあわせていけた。





初歩の盛花
立体真主型

△5頁の花▽ 仙溪

花材 雪柳（薔薇科）
おみなえし

女郎花（女郎花科）
けいとう

鶏頭（萵科）
ひゅう

花器 陶花器

細くて短いユキヤナギだったので、オミナエシを主材として高くいけ、ユキヤナギを添わせた。同じ取り合わせであっても、それぞれの姿に合わせた花型を考えていきたい。





木槿^{むくげ}の生花

△6頁の花▽ 健一郎

花型 行型

花材 木槿（葵科）

花器 陶花器

土砂降りの雨の中脚立に登り、方ぼうに生えている木槿を切っていると副家元と菜月が騒がしい。「危ないで！足滑らさんときゃ！」「健ちゃん傘いらんか？」2人とも笑いながらふざけている。言葉だけ見ると、なんとできた人なのかと思うが、副家元は台所から、菜月は3メートルほど離れたところから雨傘をさし、動画を撮っている。あとはわー、と、きゃーしか聞こえなかった。木槿にとっても雨のいい状態で切り取ることができた。庭師さんがお庭を掃除する前に、刈られてしまう木槿を生けておきたかった。祇園守りというこの木槿は夏の暑い時期から暑さが落ち着くまで、気張って咲いている。一日花で毎日花を咲かせ、毎日萎れる。今回の生花はきれいに咲いている状態のものと色が暗くなっている二つともの花を残した。景色として楽しんでいる。バック紙の色はやはりこの色だ、いつも見上げる空と共に目に映る木槿が綺麗だった。



梶^{かじ}の生花

△7頁の花▽ 健一郎

花材 梶（桑科）

花器 銅薄端^{うすばた}

2日ほど雨が続いた日の夕方。土砂降りの中、庭の梶を切った。約、1ヶ月ほど好き放題に伸びた梶を避けながら生活をしてきた家族。もう切つて飾ろうか。と何度も話が出たが、今回のテキストの撮影のために、置いていて欲しいと頼んでいた。

梶の木は神事と関連深く宮中では七夕の短冊として使用されていた。

梶の木をどうしてもお生花にしてこの竜の薄端銅器に生けたかったわけである。以前秋に乱れ菊一色の立花もこの銅器で立てたが、格があり、雰囲気^{まじ}を纏^{まと}う植物と良く合っている。

七夕の日はお風呂上がりに、妻と筆ペンで願い事を書いた。そして一晩星に見せておいた。今年は珍しく晴れていて星を見ることができた。風呂上がりに庭でゆったりと過ごす2人の時間が気に入っている。翌朝、梶の葉を取りに行くと庭を散歩していた家元が「ええ願い事やな」と微笑んでいた。

『お花の倫理』

(復興いけばな宣言)』

健一郎

光ウサギの研究は倫理的問題で中止されているときいた。動物のゆきすぎた研究は時として中止されることがあるらしいが、植物の改良が倫理的理由で中止された話を聞いたことがない。花粉のない百合や、青色の薔薇、虹色のカーネーションの販売が当たり前のようになされている。光る花は存在し、観賞もされている。花と動物の違いは、時間の違いと死の曖昧さなのではないかと考えている。

人は人以前から数世紀単位の年月を重ねるたびに、自分達から始まり、少しずつ大切にできるものが拡張されているのではないだろうか。人は誰も自分自身の存在に対して強い興味をもち思いやり、大切にしている。そして家族、友人、隣人、組織といった具合に少しずつその幅は広がる。そして大切にできる範囲は動物にまで及びそうだが、次は植物の番であると個人的には期待をしている。ただ生類憐みの令みたたく、規則として決め

るのではなく、各個人が納得した上で広がってほしい倫理観であって欲しい。動物の愛護に関しても強要はあまり効果的でないことは明らかであろう。強引さは、わだかまりをうむ。花の倫理はこれからゆつくりとおこればいい。そしてそれは石にまで広がるであろうと予測している。

岩や滝などの無機物にまで人と同じように霊的なものがあると信じられていた時代があった。狩猟生活をしていた時代である。自然の中に人がポツンといた時代だ。自然信仰が世界的に発生し、日本もその例外ではない。有機物、無機物問わず、全てのものの中に霊が宿っているという考えは、全ての物を大切にしていたからではないだろうか。有機物、無機物含めて、生きていく上で必要不可欠なものだったため、特別な気持ちを抱かせたのであろう。火を見たときに感じるあの不思議な感覚である。今、我々はその当時とは程遠い生活を送っている。

花が好きなのは趣味で園芸をしている人が多いらしい。趣味で花を育てている人は花を大切に

にしているように見える。園芸をしている花の好きな人たちの話によると、わざわざ生ける花をする必要は無いみたいだ。花が大切だから、花に対して余計なことはしたくないと言う。花は花瓶にさして楽しむだけで、余計なことはしたくないとの事。それが花を生けることだと僕は思うのだが。純粹にお花が好きなのは、その花に魅力を感じているのであって花を瓶の中で生かす行為は、いけばなではないという。

僕はいけばなをしようと思っている人でなく、花が好きな人とお花を生けて楽しんでいたいと考えている。良くも悪くも、いけばなには強いイメージがあるようだ。イメージが言葉の認識を限定させる。花の魅力を引き出すいけばなが広く知れ渡れば、お花が好きな人がお花を生けてみたくなるのではないだろうか。

絵が好きな人は絵を描けばいいと思う。花も花が好きな人に大切に生けられていてほしい。介護も人が好きな人が従事すべきだ。それぞれの現場でお花が、人がぞんざいに扱われているこ

とに強い憤りを感じている。まだ綺麗な花なのにも関わらず、いけばな展が終わると捨てられる花、真つ直ぐに育つきれいな植物をわざわざ折りまげ、切り裂いたりされる姿など、その植物がよい状態でない胸が締め付けられる。人を人と思わない態度を取る職員。介護に関しては人権があり、法で守られているため、問題になるが、花を材料として見ている態度や、花の倫理は問題になりにくい。

人は人権で守られている。動物は新しく動物の福祉ができていく。これからこの流れは加速するだろう。遺伝子の組み換えは人には行わないが、動物、植物には行う。遺伝子の偏りが絶滅リスクを高めている事にもなるが、遺伝子組み換えに対して反対しているわけではない。いま僕がこうして文章を書いている時間があるのも、その恩恵である。私が今生きている以上、簡単には否定できない。ただ、植物の倫理について、一度考えてみてほしいだけのことである。人に対するのと近い気持ちで動物に抱いた経験があるかもしれない。同じ感情を植物に抱く事は不可能ではないはずだ。

少なくとも私が生けているお花に対しては強い好意を抱いている。

花も動物も人も、在ることの尊さをただ、守りたい。そして生き生きとしているのをながめているとなんだか心地がいい。

花の尊さを認め、花の内に沁り溶け込むイメージで、花の生の魅力を引き出すのがいけばなだと思っている。誰が見ても心地がいい、生き生きとしていて、どこか温かみがある、そんな花を生けられるようになるのが今の目標であり、僕が理想とする花をいける人と花の倫理的關係である。

花の尊さを認め、
花を大切に扱い、
花の魅力を引き出し、
生き生きとした
温かみのある花をいける。

これが僕の
「復興いけばな宣言」である。

同花形之内流枝持立

花伝書を見る

立花 りつか 松除真 のきしん

行の花形 ぎよう 流枝持立 ながしもちたて

富春軒

松 苔 むくげ 百合 せんのう 仙翁花 せんわう

著我 しやが 木槿 むくげ 柘植 つげ 嫩葉 わかば

小羊齒 せうじ 桔梗 ききよう

(立花時勢粧・上)

目を引くのは低い出口から

立ち昇る真と長く横へ伸びる

流枝だが、真や流枝に添う百

合もかなり長く見せている。

ひよつとすると、百合を伸び

やかに見せたくてこの花形が

生まれたのかもしれない。

全体を見ると頭をもたげた
龍のように見える。百合の花
は開かれた龍の手、器は龍が
守る玉。漲る生命力を感じる
不思議な立花である。



富春軒

藤井隆也氏の アートと挿花

日本とドイツを拠点に創作活動を続けている藤井隆也さんは桑原専慶流の師範でもあります。

ドイツで拾ったオークの枯葉を拡大して描かれた絵が、京都鹿王院の襖絵として納められています。

昨年が続いて今年も9月に、鹿王院で新作屏風絵の発表を予定しています。

定されています。期間中はオークの襖絵も見せていただけるそうです。

藤井さんは5年前からアトリエ近くの自然を撮った写真とともに、1日1点、器に花をいけてインスタグラムに投稿されています。

挿花の背景には藤井さんの作品が。自然の中に身を置いて生み出される模様と、実際の花が響きあっているような。是非一度覗いて見て下さい。



藤井隆也さんのインスタグラムには藤井さんの作品を背景に毎日のいけばなが（5年前から一日一作！）、、、、日本でもドイツでも、季節の一枝を仕事場にいけて楽しんでいます。@fujii takaya



花材／檜扇 グロリオサ 棕櫚竹 著莪の斑入り葉 花器／染付鉢

第36回 祇園祭にいける いけばな展 仙溪

今年は祇園祭巡行復活にあわせて、祇園祭いけばな展も復活開催され、私は創作京履物「伊と忠」さんを担当。店舗の一角を大きく空けて下さり、のびのびといける事が出来た。店内には和装の履物やバッグが並び、職人さんの仕事も間近で拝見することができる。

京都市芸術文化協会賞 受賞 桑原仙溪

このたび、京都市芸術文化協会に所属し、芸術文化活動が特に顕著で、芸術文化の向上に多大の功労があったと認められる者として、表彰していただきました。

受賞に感謝し、今後一層、華道の研鑽ならびに発展に尽力してまいります。 仙溪



檜扇と七竈

△表紙の花△ 仙溪

花材
檜扇ひおうぎ（菖蒲科）
七竈ななかまど（薔薇科）

ベル鉄線てつせん（金鳳花科）

花器 陶花器（竹内眞三郎作）

ヒオウギは古より邪気を払いのける力があるとされ、ナナカマドは火災除け、落雷除けの木とされた。そんなことを知らなくとも、この2種の組みあわせには不思議な力が感じられる。白い器と赤い花が良く合っている。



岡山県本部主催

夏季研修会

華やいだ暮らしの設え

会期 7月3日(日)

会場 ライフパーク倉敷

大ホール

参加 約90名

内容 家元パフォーマンス

いけばな実習

「バラをいける」

いけばな展示

岡山県本部役員

疫病退散の願いをこめて、いきいきとした花からパワーをもらってもらおうと、岡山の先生方が力を合わせてイベントを開催して下さいました。

舞台両端には手作りの床の間や応接セットが設置され、花の飾り方を解説。中央の大作は織姫と彦星にみたてた花を即興でいけた。

厄除けの檜扇にあやかつて扇形の葉をもつ竹著我、棕櫚竹を使い、邪気を吹き飛ばす力強いいけばなになった。



ササユリきれいだなー。



ブドウのような

△12頁の花▽ 仙溪

花材 洋種山牛蒡ようしゅやまごぼう（菖蒲科）
オンシジウム（蘭科）

レナンセラ（蘭科）

花器 ガラス花器（クリシー）

セイヨウヤマゴボウは黒紫色に熟した実が潰れると服に色がつくので困る。けれども実が熟す前の枝は、野ブドウのように垂れ下がる実が面白く、白い小さな花もついていて、園芸植物には無い自然味がある。

アンティークのガラス花器に2種の蘭を添えていけると、エレガントないけばなになった。



テキスト撮影を見守るメイちゃん。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
9 月号
No. 711

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





植物散歩

仙溪

途中でいろんな花に出合えるのが山登りの楽しみなのだが、それには時間と体力が必要だ。家から日帰りで気軽に自然を楽しめる場所を訪れて、植物散歩を楽しんでいる。

7月には華道家仲間と六甲山高山植物園に行った。コアジサイの紫色の花柄に見入り、ギボシの花の蕾が丸くて可愛かった。

8月には京丹波町和知の「わち山野草の森」を訪れた。九百種の植物が育ち、四季を通して楽しめる。オミナエシが眩しく咲いていた。途中、由良川沿いの田園風景に癒やされ、鮎の塩焼きと地酒も堪能した。別の季節も楽しみである。



㊤ クサギの花が咲いていた。
㊦ 道を歩くカニ。(和知にて)

虫狩の実 菊

△2頁の花▽ 仙溪



花型 草型副流し 二種挿し
花材 虫狩

(忍冬科・連福草科)
菊 (菊科)

花器 陶花瓶 (伊藤典哲作)

ムシカリは葉を亀の甲羅に見立ててオオカメノキ (大亀の木) とも呼ばれる。初夏ガクアジサイに似た白い花が咲き、晩夏赤い実が黒く熟すころ花柄は赤く変色している。先日山で見たミズキの実も花柄が赤く、遠目では赤い花のように目立っていた。実の存在を山の動物や鳥たちに知らせるための知恵だろう。

菊 2 色

△ 3 頁の花 △ 仙溪

花型 真の花型

花材 菊 (菊科)

花器 陶水盤

水盤に剣山でいけている。比較的粘り強い茎だったので、留・総囲・控は慎重に繞めている。真・新囲・副・胴は繞めずにいた。

菊の季節がやってくる。菊は花の品格を引き出し、葉をシャキッと見せたい。



リコリス

△4頁の花▽ 仙溪

花材 裏白の木の実(薔薇科)

リコリス(彼岸花科)

スプレー菊(菊科)

花器 採泥陶花器

(宮下善爾作)

リコリスは東アジアの暖地に分布する多年草。鮮やかな黄色の花弁が反りかえり、光を放っているような明るさがある。

黄色から赤に色づき始めた実とオレンジ色のキクを合わせて、色彩の繋がりを楽しんだ。

光る実

△5頁の花▽ 仙溪

花材 酸漿・鬼灯(茄子科)

女郎花(女郎花科)

木苺(薔薇科)

花器 陶花器(市川博一作)

仙齋・素子の「花ふたり旅」

スウェーデン編にホオズキをいけた花がある。ガラスメーカー「コスタ・ボダ」を訪れ、近くの花屋で花を買い、コスタ・ボダのガラス花器にいけて写真を撮った。ホオズキは長い茎に実がついたまま乾燥した状態だっ



たのを、色を強めるため束にして実の塊をつくった。

コスタ・ボダ社のゲストハウスの一室。部屋の照明を消し、テーブルに大きな黒いガラス花器を置き、ホオズキとエノコログサを母がいけるのを横で見ていると、窓から差す光でホオズキが輝きだした。枯れてカサカサだったホオズキが生き生きと蘇るのを目の当たりにして、いけばなの力に圧倒された。

この花を何と合わせ、どんな器にいけ、どういけるか、いけた花をどこにどう置くかで、花の個性がキラッと光ることを教わった。私の大切な思い出である。

明かりが灯ったように見せたくて、黒い背景に黒い器で立派なホオズキをいけた。長く使ったがよく水を吸い上げている。緑をキイチゴで補い、オミナエシで光を広げた。

璣瓊鬼灯

△6頁の花▽ 健一郎

花材 璣瓊鬼灯（茄子科）

仙翁（撫子科）

白花鳥兜（金鳳花科）

花器 陶花器（野中春清作）

江戸時代に日本で作出された園芸品種で、鉢植えで栽培されている。種子ができないため、株分けで増やすらしい。作例はまだ色づく前のもので、色づいたものより、不思議な萼に目がいく。江戸時代に競って品種改良された朝顔を思い起こさせる。国中が花に興味感心を持っていた時代のことを考えているのは面白い。その時代に良く流通した仙翁花と山の鳥兜と取り合わせた。何度見ても不思議な形の花だった。



【訂正】

7月号・6頁の花

花器 白釉壺（崔龍熙作）



ベロニカの小品

△7頁の花▽ 健一郎

花材 エンシクリア（蘭科）

ベロニカ（胡麻葉草科・
車前草科）

花器 小物入れ（モロッコ）

団子のように固まった形をす
るトラノオ。想像するトラノオ
とは全く形が違う。一週間ほど
かけて咲いてゆくであろう花も
ほとんど全てが咲いた。予定し
ていた30分の花火大会が何かの
手違いで1分で終わってしまった
たかのようにだ。花屋で会うとな
ぜか手にとってしまう。今回は
この二輪のみ残っていたので頂
いた。トラノオらしい形をした
ベロニカは、和の花とも合うが、
奇形とも言えるこのベロニカの
強さを見てエンシクリアと合わ
せた。



羅漢図の挿花

仙溪

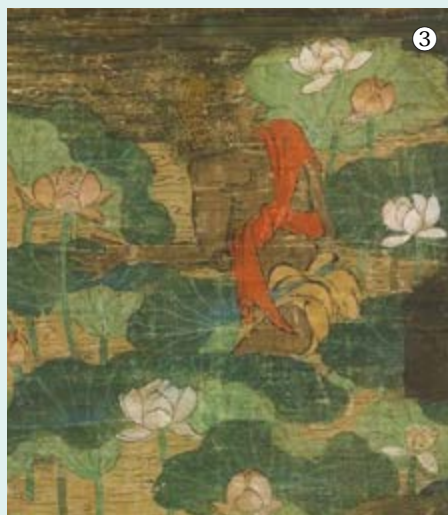
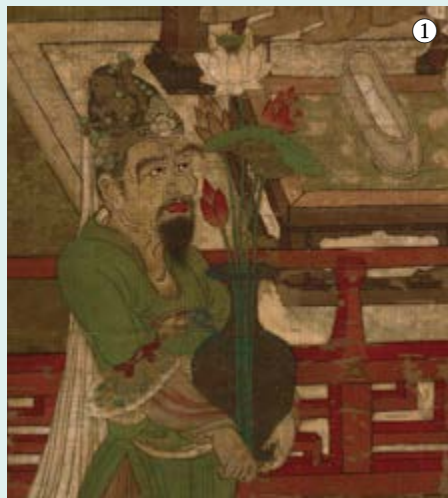
羅漢とは「修行を完成し、供養に値する者」を意味する「アルハット」を漢字音で表した「阿羅漢」の略称で、釈迦

の入滅後に長寿を保ち法の護持と人々の救済を釈迦から託された16羅漢や、超人的な能力を持つ聖人達のことをさす。平安時代中期から鎌倉時代に中国から十六羅漢図などと共に羅漢信仰がもたらされた。

平安末期に日本で描かれた十六羅漢図（11世紀）には、ハスの花葉を挿したガラス花瓶を抱え持つ従者が見える（①②）。伝来の絵を元にしたのら、中国北宋時代にはこのような供花が行われていたもの

と想像できる。前に紹介した遼の墓所（1116年）に瑠璃瓶に挿された供花の絵が描かれていたことも繋がりを感ずるし、日本においては鳥獣人物戯画（平安末・鎌倉初）にハスの供花があり興味深い。

戦乱によっても衰退しかけた仏教は、宋代に庇護をうけ再興する。明州には禅僧の栄西や道元も訪れ、大陸の文化を吸収して日本へ持ち帰っている。仏教復興の時代に日本や高麗と交流が続く明州で、この羅漢図百幅は10年以上の歲月をかけて描かれた。



別の羅漢図には蓮池でハスの花葉を採取し、青磁の花瓶に挿して仏に供える場面がある。中国・南宋時代に明州（現在の寧波）で描かれた五百羅漢図・百幅の一つだ（③④）。明州は古くから海上交易の拠点として栄えた港湾都市で、702年以降の遣唐使船もまですこに上陸して唐の都、長安（現在の西安）を目指した。唐代後期の廃仏法難以後、

蓮池の描写は南宋の都・杭州（当時は臨安）の西湖を彷彿とさせる。杭州は明州のすぐ隣だ。明州にも東銭湖などハスは身近にあったと思われる。気候おだやかなこの地域（江南地方）では、実際にハスを花瓶に挿して供えていたのだろう。彼の地で修行中の栄西や道元もハスを切って花瓶に挿したのだろうか。



十六羅漢図（国宝）の一つ。11世紀。聖衆来迎寺伝来。東京国立博物館蔵。
出典①②： https://emuseum.nich.go.jp/detail?content_base_id=100157&content_part_id=016&langId=ja&webView=e 国宝サイトより転載



五百羅漢図 100幅の一つ「採蓮」。12世紀後半、明州の恵安院（東銭湖畔の寺院）に施入。現在は京都大徳寺他に伝来。
出典③④： <https://kknews.cc/news/o9ok5b6.html>



「なんかえな」

△表紙の花▽ 健一郎

花材

夏櫨 (躑躅科)

夏櫨 苔木

犬蓼・赤飯 (蓼科)

沢桔梗 (桔梗科)

仙翁 (撫子科)

竜胆 (竜胆科)

女郎花 (女郎花科)



白花鳥兜 (金鳳花科)

裸萩 (裸萩科) ピンク

萩 (豆科)

宝鐸草 (百合科)

梅苔木

花器 銅砂鉢

苔の豊かな木を探してはいるのだがなかなか見つからない。先日、庭師さんのトラックで見つけた苔がべったりとついた樹齢70年くらいの梅の切り株を頂いた。特に何かを見越して頂いたものではなかったのだが、季節の砂物によく合った。苔がよい景色を作っている。真の隠しは平安神宮を散歩していたときに拾った松の皮。層を眺めて感心し、部屋に飾っていた。模様が綺麗だ。これも何かを考えての物ではなく、好きな石を持ち帰るような感覚である。小学時代に良く石を集めていたのだが、何か自分に強く反応させるものを集めることが最近増えた。「なんかえな。」という感覚は忙しい時間の中で見過ごされやすいが、ゆったりとした時間に生きているとよく味わえる。なんかえなと思った季節の花を一つの砂鉢に出合わせた。いい景色だ。



レモンとメイ

蓮の立花

健一郎

花型 蓮一色

花材 蓮 (蓮科)

花器 手付陶花瓶

上野淳泉先生の教場にて。

8月21日。(倉敷市)



蓮の立花

健一郎

お盆も終わり、花の出荷が終わった後の蓮畑で、好きなだけ蓮を切らせてもらって立花を立てた。僕にとって初めての蓮一色である。前の日までは雨が降っており、蓮の葉は日光で傷んでない。お水も良く吸っている。当日は曇りで、蓮の花を切り取り終わると雨が降ってきた。

ハスの立花をする上でこれほど恵まれた環境はないだろう。以前の河骨の立花を立てたときにもお世話になった先生をはじめとし、たくさんの方の先生にお世話になった。立てた立花を最後に13世家元の愛弟子である95を迎えた大先生に拝見して頂いた。

曇りのため、朝6時から蓮を取りに行く。辺りはまだ静か。畑には一面に蓮が広がっている。長靴、レインコートを装備し、真になりそうな葉から取りに行く。奥の方にいい葉がある。目がけて分け入ろうと沼へ足を踏み入れると足が沈む。ハスの方が背が高くなった。見上げると蓮の葉で周りが見えない。先

ほど見つけた良い葉はどこへ行ったかわからなくなる。大きな葉の下には巻き葉がある。役枝にしようとは考えず、綺麗だったので切り取った。蓮はどの段階で、いつ見ても雰囲気があつて面白い。綺麗な葉、花を探してどんどんと奥へ分け入る。花の香りがした。甘くすーつとする香りだ。私はいまハスの中にいる。まるで蓮に溺れているかのようだ。足が抜けなくなってしまうが、なんとか歩く。無理して手を伸ばして綺麗な蕾があつたので頂き引き返す。その拍子に蓮を切る音が聞こえた方を見ると女性の先生が慣れた手つきでズバズバと葉と花を集めているのを発見した。まだ僕はあそこまで行けそうにない。きつと、歩き方や装備の違いであろう。倉敷の先生方は毎年の恒例行事を心から楽しんでいて。

手早く花を取り終え、生ける場所へ持ち帰る。水揚げをしながら花を立てていく。河骨の立花のときにもお世話になった先生についてもらい、脈々と受け継がれる技、感覚を吸収する。結局は触るしかない。

家に帰り着くと、95を迎えた大先生から電話がかかってきた。蓮の安否の確認、僕の安否の確認、京都から来てくれてただけ嬉しかったか、蓮にとつて京都で他の人に見てもらえることがどれほどの幸せであろうか。大先生自身が自分が蓮であるかのように何度もお礼を頂いた。きつと大先生は蓮の代わりとも思っていないだろう。お礼を言おうとしていたはずの僕が勢いに飲み込まれてしまった。

蓮ちゃんにもよろしくね。と、電話は終わった。大先生と花の境界線が曖昧で、ぼやけている。ましてや今回大先生はハスに触れてさえないのに。終戦後18

歳から花の道に入り、没頭。花だ。本当に楽しそうにその当時に厚みを持たせるべく油絵、書道、大工仕事を勉強する。未だた。私も思いつきり、この生を堪能したい。



同砂之物

花伝書を見る

菊一色 砂の物

専定寺（富春軒・初版）

菊 小菊

（立花時勢粧・下 秘曲の図）

「砂の物」にも真行草がある。二株立てで、男株と女株に軽重がないように立て、どちらにも正真と前置があるものを「行の砂の物」という。

この図「菊一色砂の物」は男株と女株の軽重が自由で、二株であっても正真一つ、前置一つなので「草の砂の物」である。

「株立は異曲風流に意気はづみを第一として立てるが、とりわけ草の砂の物では、一手珍しき作意がなければ叶わない。」と富春軒は書いている。

向かって左の株から真の菊が右側に除いて出ている。普通なら左に除いて出るところ

を逆にすることで意外性を生んでいる。「珍しき作意」である。

挿花の神髄を習得した上で、定石にこだわらない自由な精神が備わってこそ「一手珍しき作意」は生まれる。



専定寺



クロトンの木

△12頁の花▽ 桜子

花材 クロトン（燈台草科）

カラー（里芋科）

アンスリウム（里芋科）

花器 銅器

稽古でいけるクロトンは一枚ずつの葉としていける事が多い。水上げが悪いので、足元に添える葉として売られている。トウダイグサ科の植物なので、先端が黄、赤、オレンジ色に染まり、葉脈がくっきりと美しい。葉の形が槍の先の鉾（ほこ）に似ているので鉾葉系と呼ぶそう。今回は鉾のクロトンの木を切らずに根のまま包んで銅製花器にいけてみた。花器の口も中也広くてすっぽり包み込む大らかさ。根ごといけたのでよく保ってくれている。暑い時期で保たない花が多いが、取り合わせを色々替えながらお玄関の迎え花として飾っている。



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2022 年

10 月号

No. 712

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





季節を味わう

△表紙の花△ 仙溪

花材 野茨（薔薇科）

糸菊（菊科）

木母（薔薇科）

花器 陶水盤（市川博一作）

赤い実に紅葉した葉を合わせ
季節の花を覗かせる。この組み
あわせが気に入っている。いけ
あがった姿をあれこれと想像す
るのが楽しい。

その季節の自然の恵み、輝き
を感じる花をいけたい。



ホトトギス

△2頁の花△ 仙溪

花材 杜鵑草（百合科）

白花藤袴（菊科）

小菊（菊科）

花器 陶水盤

風が涼しく感じられる頃、ホ
トトギスの花が咲きはじめる。



深秋

△3頁の花▽ 健一郎

花材 乱れ菊3種（菊科）

嵯峨菊2種（菊科）

花器 陶花瓶

秋が深まると何と言っても菊が美しく感じられる。花屋でもさまざまな菊が迎えてくれる。乱れ菊は自然の勢いをそのままに生け、嵯峨菊は品良く生けた。その後、家元のアドバイスで枯れ葉の景色を作った。いい景色である。

葉の脇に咲くものと、茎の先端に咲くものがあるが、後者なら伸びやかに軽やかに、葉と葉の隙間を見せていきたい。
赤と白の小花がホトトギスの花色に優しく寄り添っている。

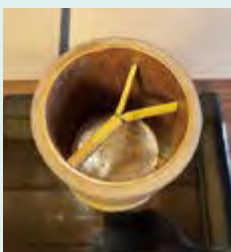


葉蘭^{はらん} 九葉 生花 行型

葉蘭は中国原産の多年草。地下茎から1枚ずつ葉が出る。
最初は巻葉で伸び出てくる。巻葉の外側が内側よりも太陽光を多く受ける分、幅が広くなり、開いた葉では左右で幅が違う。右巻き左巻きの両方がある。
右の広い葉と左の広い葉、両方使うことで出生^{しゅっしょう}を表現する。
美しい姿形になるよう葉を選べば自ずと両方の葉が必要になる。
左右同数大中小の葉を多めに用意した中から葉を選んでいけすめる。



新囲と見越はどちらを高くしても良い。



又木配りは小さめ
にかける。



葉にもよるが、一番大きな葉を真に選んで、
中程で茎をしごくように撓めておく。控・
胴沈みには小さい葉を残しておく。胴沈み
のかわりに副沈みでもよい。



◎いける順番や入れる場所はそのつど工夫する。横配りはしっかり強めにかける。



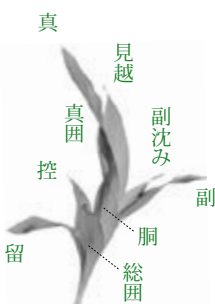
葉蘭九葉^{はらん}

△6頁の花▽ 仙溪

花型 生花 行型
 花材 葉蘭（百合科）
 花器 煤竹竹筒^{すすたけ}

葉蘭は足元を切ることにはあっても葉先を切ってはならない。葉の大小、葉のくせをよく選択してその組みあわせ方を工夫し、流麗な形を作りあげる。

葉の形は同じようではない。それぞれに「くせ」があり、花形の中で用いる場所を考えるわけだが、なかなかこれが難しい。数多くいけて様々な葉の扱いに慣れ、形作のための技巧を身につける修練が必要となる。いろいろ工夫するうちに、自分なりのコツを掴める時がある。そんな積み重ねが葉蘭の生花には必要である。





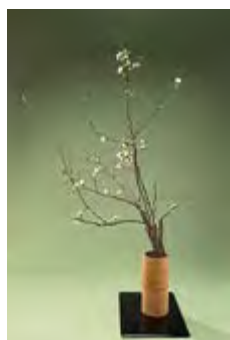
木瓜^{ぼけ}の生花

△7頁の花▽ 健一郎

花材 白木瓜（薔薇科^{ばら}）

花器 白竹竹筒

木瓜の枝ぶりは面白い。植わっているのを見た際の迫力とは大きな違いが出る。面白味のある枝が多すぎるため、どう魅力を引き出すか考えている時間がいい。枝取りをする際、留に配した枝を見た瞬間に花形が決まった。面白くしようとはしていない。面白い枝だったのだ。春と秋に木瓜は咲くが、鳥の食べ残した実が残っていることもある。もっとも、僕が鳥なら、棘だらけの木瓜に近づかないだろう。木瓜の棘が険しかったところに実があつたのだろうか。春と秋で生け分けることは難しいが、小さな秋を大きく表現できた。





きささげ
楸の生花

△8頁の花▽ 健一郎

花型 生花 二種挿し

花材 楸（うげんかすら）
梅（ばい）花（か）躑躅（つづじ）（躑躅科）

梅花躑躅（躑躅科）

花器 遊環耳銅花器

留の梅花躑躅で大きな動きが、楸の存在感を強くさせる。楸は撓め難く、水が上がるか心配していた。撮影して一週間後、新芽ができていたので問題ないだろう。その後ますます大きくなっている。



キササゲの枝から新芽がでてきた。



横から見た奥行。



秋草の立花

△9頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花

花材

真 女郎花 (女郎花科)

見越 男郎花 (女郎花科)

副 梅花躑躅 (躑躅科)

請 吾亦紅 (薔薇科)

控枝 水引草 (蓼科)

正真 秋海棠 (秋海棠科)

胴 七竈 (薔薇科)

〃 秋明菊 (金鳳花科)

流枝 徳咲下野 (薔薇科)

前置 杜鵑草 (百合科)

老い 鳥兜 (金鳳花科)

花器 陶花瓶

ゆったりとそれぞれの秋草の魅力に浸るように立てた立花。季節に溶ける感覚が気持ち良い。



左斜め横から見たところ。

余計なお世話

健一郎

今僕が働いているグループホーム（認知症対応型共同生活介護）とは、共同生活を通して自立の支援を行い、充実した豊かな日々を送ってもらうことを理念とした介護施設である。食事の用意や片付け、洗濯や掃除といった日常生活に必要なことを各自で行い、どうしても行えない場合に職員への補助が入る。

しかし実際の生活では、利用者さんが何かを自分でやろうとすると先回りして職員のサポートが入ってしまう。こんなにつまらないことは無いだろう。やってくれることが本人の自立を奪っている。そこには自己肯定感や達成感を得られる余地はない。認知症の症状が出たことよって行動が制限され、挑戦することも止められて、何も自分でできないことよって自尊心が大きく傷つくこととなる。

大きな台風が近づいた日

だった。利用者さんが、「そろそろ帰ります。」と言って席を立った。なぜここに居るのか分からず早く家に帰りたいのだ。いつもなら職員は動揺するのだが、台風や大雨の日は違う。「外を見てください！今日は大変ですよ。よかつたらご飯を食べて泊まっていってください！」と上手に誘導することが出来る。その後利用者さんは「いいの？ありがとうございます。」と礼を述べる。定型化されたこのやりとりについてから違和感を覚えた。

にこやかに台風の情報を伝える職員を見てみると、どうしても帰らなかったが帰ることができない利用者との温度差に疑問を抱いてしまう。

僕が働くグループホームではリスクというリスクは全て取り除かれ安全だ。しかし、職員の仕事は施設内での素人仕事の家事代行と転倒や怪我がないよう安全に何もなく1日を積み重ねることではない。自立の支援を行い、豊かな日々を送ってもらう事である。お互いが認め合い、共同で生活

をする関係が望ましい。

人はそれぞれがそれぞれの形で自立をしている。僕は家では伯母に食事をこきえてもらっているが、その食材は運ばれてきたものでそれは畑から・・・というように、自立は支えあつてこそ可能である。

認知症ケアは、お花を生けるのと似ている。僕がどうすればその対象が良い顔をするかを楽しんでいる。できるだけ、自分が良いと思う思い込みから離れ、その対象がどんな状態であるようにするにはどうすればいいか、そのことに集中するようにしている。その際に予測を超える反応が本物に感じられて、人が植物がより好きになる。といったことをどこで何をしていても感じるようになってきている。器がどう思っているかもその一つである。花をいけた器が、料理を盛った器が良い表情を見せてくれると嬉しい。

守ってあげるといふ名目の

もと、人のやることを先回りしてしまうのはその人を信じていないことの裏返しである。それは相手にとって必要な支えでは無く、余計なお世話でしかない。人は誰でも生き生きと生きたいのに、まわりの環境がそうさせないことが多い。生き生きと生きるには互いの信頼が欠かせない。信頼し合う環境でこそ、生き生きとできると信じている。

管理は安心感を与えるが、そこでの生活は無機質で、守っている側のみいい気持ちでいるのでむしろその行動はエスカレートする。守る気持ちは時として対象の力を奪うことになる。

人は個人の単位でさまざまな障害を抱え、それぞれに支えを必要としている。あるときはお世話をし、あるときはお世話になつていく。お互いが生き生きと生きるには、生きる力を奪う「余計なお世話」ではなくて、生きる力を応援する者でありたい。

同

花伝書を見る

立花 りつか 梅擬除真 のきしん
除心の内草の花形

富春軒

梅擬 うめもじき 枇杷 びわ

菊 きく 小菊

熊笹 くまざさ 伊吹 いぶき 嫩葉 なは 檜木 ひのき

(立花時勢粧・上)

固定観念を払拭するかの
ように、ビワの葉3枚だけ

でさらりと胴をつくり、ウ
メモドキの軽やかさに対応
させている。更にクマザサ
の茂みが呼応する。

花材の選択と工夫の妙味。



富春軒



カラジウムの葉

△12頁の花▽ 桜子

花材 鶏頭けいとう（苧科）

カラジウム3種

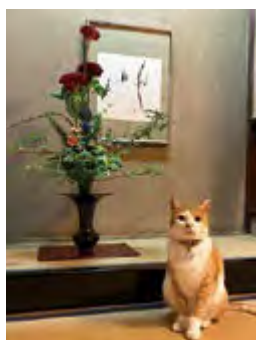
（里芋科）

花器 陶鉢（アメリカ）

熱帯アメリカ原産のカラジウムは夏から秋に鉢植で手に入る。葉色や葉脈の表情が1枚ずつ違う。色の違う3種類のカラジウムで色と形に変化がつけられる。ケイトウと対等にいった。



立花研修会（健一郎先生指導）のケイトウの立花の前で。
レモンちゃん、はいポーズ。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
11 月号
No. 713

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



今年も届いた烏瓜

△表紙の花▽ 櫻子

花材 烏瓜の実（瓜科）

白花杜鵑草（百合科）

蓼（蓼科）

花器 煤竹手付籠

5年前からカラスウリをテキストに載せている。お弟子さんが庭で採ったものだ。過去に3作仙溪がいて、今回は健一郎と私がいけた。それぞれに違う味がある。

私は赤と白の野草を合わせて籠花にした。煤竹の温かみのある色が良く似合っている。



烏瓜の花
7月撮影



秋草と色づく葉

△2頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 更科升麻（金鳳花科）

丁字草（夾竹桃科）

木苺（薔薇科）

花器 陶水盤





サラシナシヨウマの自然な曲
がりを生かして生花にいたけた。
2種の葉色がいい景色になって
くれた。



実の色を集める

△3頁の花▽ 仙溪

花材 蔓梅擬(錦木科)
菊(菊科)

白花藤袴(菊科)
花器 陶水盤

ツルウメモドキの勢いを楽し
んでいけた。前方に実を集め、
緑の濃淡で実の色を際立たせ
た。





徳島だより

毎年お盆の頃、華老の武田慶園先生とお弟子さん達は地域の文化サロン展に大作花をいけ続けておられ、今年で47回目となる。サロンを主宰する藤原茂喜さんは「文化力を高めるには作家が集い発表できる環境が重要」と。貴重な集いの場だ。

空色の器に

△5頁の花▽ 仙溪

花材 山茱萸の実（水木科）
岡虎の尾（桜草科）

金水引（薔薇科）

花器 陶花器（木村盛伸作）

水が冷たく感じる季節。実が色づき、葉が秋色に染まってく。小さないけばなでいいので、移ろう季節の輝きを部屋にいて眺めていたい。



檀^{まゆみ}と菊の盛花

△6頁の花▽ 健一郎

花材 檀^{にしきぎ}（錦木科）

菊4種（菊科）

竜胆^{りんどう}（竜胆科）

花器 陶水盤

菊ほど盛花が適しているお花があるだろうか。盛花だと菊の良いところを余す事なく味わうことができる。

糸菊のサラリとした葉も綺麗だが、一輪菊のようなハリと厚みのある葉も好きだ。盛花だと一輪菊の品を醸す葉が美しく見せられる。

立派な檀の葉の隙間から実が顔を覗かせる。



冬芽を楽しむ

△7頁の花▽ 健一郎

花型 生花 二種挿し

花材 水木（水木科）

菊（菊科）





花器 白竹竹筒

葉と花を落とした枝に花芽が付いている状態。冷たい色のバック紙を使用し、自分の感じている雰囲気になんかは近いものを表すことができたと思っている。お花屋さんでは「まつ毛」と呼ばれていた菊。根締めになんと安心する。



レモンの顔がキズだらけ…。夜中に野良猫と戦って、メイちゃんを守ってくれていたのかな。



桑原健一郎 立花
アララギ 梅擬 檜 ひのき
躑躅 つつじ
・ 銅立花瓶



家元の「やってみなはれ」の一言から端を発し、今年3月の流展からの弾みもあり、社中展が気がついたら終わっていた。あつという間の3日間だった。

花と人が心地よさそうに過ごすこの空間は特別なものだった。自分が日頃から考えている事が姿として現れたようだった。鹿

王院の場、藤井隆也氏の屏風、襖絵、お花、お弟子さん、見てくださる方が生き生きとした空間を目指し拵えた。当日の生け込みは自分のお花を立て終える

とお弟子さんの構想を聞き、安心して任す。することがなくなつた僕はお庭を見てコーヒーを飲んでいた。皆の途中経過を見て回るのは楽しかった。普段の稽

古と違ふ点は特別なお花と特別な場所であること。皆、それぞれ空間の中にあるお花を見つめていたのが印象的だった。多少の課題は見つかったが、概ね満足している。「みんなそれぞれの個性を生かし力を合わせて手作りする感じがとても好きです。」とお弟子さんからあったひとことは僕のお気に入りである。

この花会が成り立つにあたり、それぞれの方が目を輝かせ、尽力下さった。その場の物から人まで在ることに不思議な気持ちで一杯だ。

ありがとうございました。

特設サイト
↓



華道桑原喜慶流

右京で次期家元 初いけばな展

華道桑原專應流（京

元桑原健一郎さん(25)
の初めてのいけばな展
が23~25日、京都市右

京区の鹿子院で開かれ

桑原さんは、同流の二期家元として、大学

(栗山妻)

生き生きとした花の姿を求めて、いけはなに向き合う桑原さん

（京都市中京区・桑原町）慶流家元

手道家のいけばな展などに出品してきたが、自身が主催するのが、今回が初めて。同流に伝わる伝統的な立花や生花、現代的な盛花などで、それぞれの植物の「らしさ」を表す。



蓮の枯葉 蓮台 ^{ひめがま} 姫蒲 ^{しらん} 紫蘭 ・ 陶水盤



^{おみなえし} 女郎花 ^{しゅうかいどう} 水引草 ^{いぬたで} 秋海棠 犬蓼 ^{ほととぎす} 白花杜鵑草 他 ・ 手付竹籠



黄糸菊 赤紫菊 赤小菊 白小菊 白万寿小菊 ・ 陶水盤



生花 ^{まき} 朝鮮槭 ・ 銅薄端



生花 ^{やまにしきぎ} 山錦木 ・ 陶鉢



^{まゆみ} 檀 (黄葉と実) 黄菊 白菊 ・ 陶水盤



立花 ^{なつはげ} 夏櫨 (紅葉) ^{ななかまど} 七竈 ^{まゆみ} 檀 ^{つつじ} 躑躅 ^{りんどう} 黄糸菊 竜胆 晒木 ・ 銅花瓶



立花 ^{つるうめもどき} 蔓梅擬 ^{むいらぎ} 柊 (緑葉と黄葉) ^{りんどう} 竜胆 ^{ふじばかま} 藤袴 白花藤袴 ・ 銅花瓶



西洋鎌柄（黒い実） 躑躅 杜鵑草
・ 陶花瓶



梅花躑躅 石榴（実） 山芍薬（実）
・ 陶花瓶



薄 小葉の莢迷（赤い実）
白花野菊 ・ 陶水盤



檜扇（花と実） 白花藤袴 桔梗
・ 陶水盤



野茨（赤い実） 雪柳 赤薔薇
・ 陶花瓶



檜 竜胆 藤袴 ・ 陶水盤



立花 鶏頭2種 紐鶏頭 鼠 薔
龜甲榿木 黄金檜葉 竹蓍莪
銅広口花瓶



生花 数山査子 ・ 白竹竹筒



夏櫨（紅葉） 秋明菊 赤小菊
・ 陶花瓶

直心立之内草之花秋

花伝書を見る

立花 りつか けいとう すぐしん 鶏頭直真

直心立の内草の花形

桑原正栄

(富春軒仙溪・初版)

鶏頭 柳 梅擬 菊

擬宝珠 檉木 檜扇

躑躅 伊吹

(立花時勢粧・上)

うに目のある所に目あり、鼻

ある所に鼻があるように」と

の古人の言葉を引用している。

型の中でどれだ

け草木の個性を引

き出せるかが問わ

れる花形である。

松以外を真(心)にした直
真立花は「直真立・草の花形」
になる。「直真立草の花形とい
うは心に梅、海棠、梅擬、水木、
檜、鶏頭などの直なるを用い
る」と書かれている。

直真立ては法度を守り格式
に背かず、草木きれいに素直
なものを丈高く幽玄にさすこ
とを本意とする。「人の顔のよ



同



烏瓜からすうり

△12頁の花▽ 健一郎

花材 烏瓜の実（瓜科）

きんぎょのうせんからすら
椒（凌霄花科）

花器 陶花瓶

山に向かう道中や、あまりにも立派な烏瓜だと車を途中で止め見に行く。葉は乾燥に弱く、すぐに枯れてしまう。

私自身、花を生けるときに園芸化された花も好きだが、できるだけまだ山の香りが残っている植物を相手にしている方が合っている気がする。その際に強い高揚感や植物と共にある感覚を強く感じる。自分でも不思議な気がしている。

家元稽古のお弟子さんから頂いたものを分けてもらった。絡からまりやすいはずの葉や蔓がとても綺麗にとられ、丁寧に包まれている。烏瓜も驚きだろう。もう一度絡めさすという奇妙な体験をすることができた。お花を生けることの妙な感覚が久しく思い起こされた。お気に入りの楸きんぎょに絡ませると、烏瓜を生かすことができた。先まで綺麗に包まれていた葉を味わいきった。花を生けることはその花を深く味わうことである。

いけばな

桑原専慶流

テキスト

2022 年

12 月号

No. 714

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





実り

仙溪

栗の渋皮煮を頂戴した。鬼皮だけを剥き、渋皮を美しく残すには熟練の技がいる。砂糖で煮るだけのシンプルな作り方だそうだが、飴色の見た目も美しく、柔らかで甘くて美味しい。

ちなみに調べてみると植物学上では鬼皮が果肉で、渋皮は種皮、その内側が種子にあたるので、種を食べていることになる。他にもイチゴは花托がふくらんだもので、表面のつぶつぶが果実にあたるそうだ。一つの花にめしべが百以上あるためにそうなる。

植物が子孫を残す工夫は千差万別だが、種子を宿した「実り」の姿はそれぞれに美しい。見て食べることに加えて、いけて実りを味わっている。

ロウヤガキ ロウアガキ

△2頁の花▽ 櫻子

花材 老鴉柿（柿の木科）

糸菊（菊科）

木苺（薔薇科）

花器 手付き木通籠

ロウヤガキは中国原産の小さな実の柿で、黒く熟するため鴉の



字がつく。読みはロウアガキなのだが、呼びやすいロウヤガキと呼ばれるようになり、老爺柿と書かれることもある。
色づいた木苺が季節感を深めてくれる。



コガネシダ

△3頁の花▽ 仙溪

花材

美男葛（松房科）
水仙（彼岸花科）
黄金羊歯（岩櫨、葉科）

花器 燻し赤花器

小さなシダが密生した鉢植を土ごとビニールで包んでいける。黄金色というより曙色（あけぼのいろ）だろうか。優しい色の繁みから季節の実と花を覗かせた。





2種の実

△4頁の花▽ 仙溪

花材

姫笹ひめささ（檜科）

七竈の実ななかまじ（薔薇科）

梅檀の実うめだん（梅檀科）

花器 金属花器

ナナカマドとセンダンの実と常緑のヒムロスギ。実たちが主役のいけばな。



柊

△5頁の花▽ 健一郎

花型 生花 草型 副流し

花材 柊ひいらぎ（木犀科）

花器 陶花瓶

ひーいらぎ飾ろう、ふあらららーと12月になるとこのメロディーが街を包み込み、クリスマス色になった。このDeck the Hallsはウェールズの民謡である。去年の冬2人でリトミック※を受講して以来この音

※リトミックⅡ伴奏にあわせて楽器を演奏したり体を動かしたりして、潜在的な基礎能力の発達を促す音楽教育法。



樂が一年を通して頭から離れなくなつた。季節関係なく頭で流れ2人で口ずさむ。民謡独特の中毒性とリトミックの楽しさが合間つてのことだろう。キリスト誕生の数百年前、ケルトの文化ではセイヨウヒイラギを死と再生のシンボルとして崇拜されており、意味合いは変われどもゲルマン人においてもキリスト教においても特別な常緑樹である。日本においても特別な木で古くから柗の鋭い棘は邪気を払うとされ庭に好まれて育てられており、節分ではお馴染みの樹木である。年を取ると葉は丸くなるらしく家の柗はそれであったのだが先祖返りをしており、年々棘が増えてきている。

家の庭の柗が咲くと、僕と妻は喜ぶ。2人にとつてなんだか特別な木であるようだ。枝振り、艶のある葉、花の甘い香り、魅力で溢れている。妻と愛でる好きな木のうちの一つである。作例はたまたま花を付けた柗をお花屋さんで見かけたので求めた。取り合わせや様式では迷わず、生花を選択した。一種で堂々とした立ち枝と勢いのある横枝。それぞれを味わい、その魅力を引き出そうとした。良い季節の花である。



梅擬の生花

△ 6 頁の花 V

花型 生花 草型 副流し

花材 梅擬 (繡の木科)

花器 銅薄端

日本いけばな芸術展出品作

和田慶千

梅擬除真立花

△ 7 頁の花 V

花型 除真立花

花材 梅擬 (繡の木科)

松 (松科)

伊吹 (檜科)

鼈甲桎木 (錦木科)

見返り草 (紫蘇科)

大文字草 2 種 (雪の下科)

斑入り紫蘭 (蘭科)

杜鵑草 (百合科)

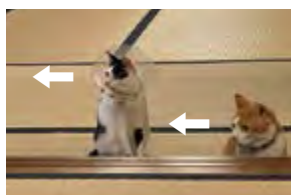
寒菊 (菊科)

花器 天女紋銅花器

日本いけばな芸術展出品作

桑原仙溪

梅擬の生花と立花。実の小さなものは滅多にいけられない。折れやすいので、太くてひねた枝のどこが生花の真、副、留になるかの見極めが肝心だ。引



健一郎先生が立てた立花を一緒に拝見するレモンとメイ。

き締まった水際が作れば、水面から立ち昇る生花特有の美しさが生まれる。

立花には梅擬の伸びやかな細枝を真に立て、松の緑と季節の草花を取り合わせた。ぐるぐると捻れた松をどう見せるかに悩んだが、様々な方向へ出た花材の調和が立花の見所であり醍醐味だ。多種の花材を調和させることができる立花という様式の不思議さ。それを生み出し、自然の妙味を味わい尽くした先人は、会得した物を花伝書に残している。いけばなは今もその延長線上にある。

なぜ人は花を見て落ちてくのか

健一郎

華道家らしい花展とイベントで目まぐるしい秋だった。秋のお花を花屋で見ても展覧会やデモンストレーションで生けるのは気持ちが良い。その裏で日は一日づつ過ぎ、いつの間にか秋を感じる前に終わってしまうかもしれないという焦燥感と過ぎた秋でもあった。その時の自分の願いは御所を散歩したい、ただそれだけだった。家が近いという理由だけで、特に御所である必要は無いのだが、秋を感じられる場所、季節、自然に身を投げたいと言う思いは日に日に募る。

花をいけるだけでは満たされていない。自分は、自然に身を投げ、その余韻のようなものなのだろうか。自然の場にいずとも草木といられるのは。切った方がその花とよく向き合える。それは己の未熟さもあってだろう。自然の中から帰ってきて初めて自宅で花を生けられる気がする。

目に見えるところ以外でも人工的な空間は驚くほどの勢いで増えている。SEの書き出す未来は幾何学的に合理的に設計された超人工的な空間を思い浮かべる。そしてそれは今は実現しそうにも見える。

SEの世界のような企業はいくつか思い浮かぶが、アメリカのAmazonという会社が植物趣味の建物を作ろうとしているらしい。Amazonは最先端のAIで最適化し、未来を予測する会社でその判断が、短期的には結果を得ることができて20年後の正解であるかは分からないらしく、最終的な決定はCEOの感覚であるようだ。予測出来ないことが日常的に起こる。そして少しでも正確な答えが出せるよう精度を上げるため、Amazonはバイオフィリアの建物を作ろうとし今注目を集めている。バイオフィリアとは、人間は本能的に自然とのつながりを求めるという概念で、心身の状態を良い状態にするためには人との状態もだが、自然との関わりが必要不可欠であると言

う考え方である。絵画史において風景画は、身の周りから風景がなくなつてからおこつた。人工物で溢れ自然の物がなくなつた場所において自然が求められるというのは自然な流れだと感じる。

「E」か、「A」化に進むも、つまるところは自分の感覚である。それを研ぎ澄まさせるためにバイオフィリアの効果が期待されている。経営をする人の中にもビジネスマンの人の中にも一部の人は木の枝、灯台躰とうたいなどを飾る人がいる。そしてその中でも最近では観葉植物に注目が集まっているらしい。在宅での仕事や家にいる時間が長くなったことが起因しているとのこと。豊かな自分があつてこそ他のことができるのだという。ビルや自動車道の街路樹といったグリーンではなく、四季と人生のうつろいを感じさせる自然の設計を求める流れになつていくのだろうか。植物を楽しむ人が増えるのは喜ばしいことである。

人がいまのビルに囲まれて生活していた時間より、緑の中で

生活していた時間の方が長い。建物を創る前までは、緑の中が安全で敵がいなかったためである。そのため落ちてくのだろうか。

なぜ人は花を見て落ちてくのか。自分なりに感じたことをつらつらと書いていく。

10万年前の墓穴の一つからムスカリであろう花粉が見つかった。ネアンデルタール人。人間の生命と花が初めて結び付けられた。花と人間の魂、靈魂との関係を示したのとして有名であるが、このときには花に対して特別な気持ちを持つていたと捉えて良さそうだ。それより以前のことにについてよく考える。

まず人以前の話から考える。木の実を予兆させるものとしての花があつたのではないかと考えている。

猿は食虫類から進化してきた。モグラやヒミズの仲間、蟻とかミミズを食べていた。猿の祖先は虫食い。サルサルの祖先は森の中へ虫を求めて入つてい

き、虫食いの生活をしていた。虫食いも一括りにはできない。逃げ足の早い甲虫や蛾蛾を食べる猿、幼虫を捕まえるのが得意な猿に別れた。そして強い種が幼虫を食べられる下層部を占拠した。追いやられた甲虫を食べる猿はやがて、果物を食べるようになり、さらに追いやられた猿は葉っぱを食べることになった。葉は果物の2倍のタンパク質を含有している。よつてオランウータンや、ニホンザルのように大型化し、肉を食べるヒトとなった。負けるが勝ちとはこのことであろうか。生存競争に負け、新しい食生を探し続けた結果である。負けて果物を食べる種類の身体が大きくなつていった。

そして果物や葉を食べる種類は頭を使うようになった。動くものに本能的に反射で捕まえて虫を食べる種に比べ、どこにどんな木があり、どの季節にその実がなるのか。その実はいつできるのか。どうやら花の後に実ができるらしいと発見した種はそうでない種に比べ有利だったに違いない。その頃から、花の

状態や葉の状態、植物に強い関心を持つていたのだろうと推測している。記憶力、認知能力が上昇したのだろうか。

よくお弟子さんや、いけばな体験をしている人はお稽古の花に対して「美味しそう。食べられますか？」と実物^みはもちろん花に対しても多くの質問がある。葉に対してはまたない。赤ちゃんや小動物に対して、食べてしまいたいくらい可愛い。というのも綺麗なものに對して抱く気持ちという意味では何か関係がありそうだ。理屈なしに花と向き合う、没頭した大人や子供と話している時間は豊かで多くの発見がある。

鳥類も虫や、果実が主で葉っぱを食べるものは極めて少ない。猿はライバルが多く、葉っぱを食べるしかなかった。だが植物は葉を食べられる想定をしていなかったで、食べられないようにするために毒のあるものが多い。そこで猿は恐る恐るつまみ食いをする。一つの毒を集中させない毒の分散である。マハレというタンザニアのチン

パンジーは、300種くらいの食物メニューを持つている。日本猿であつてもだいたい100種は食べるそうだ。我々も色々と食べているが、種類数では到底敵わないほどである。猿は毒のものを見つけると、学習し、それを子供に伝えるのだが、私はそれを文化の芽生えであると考えている。

それぞれの場でそれぞれの種の生活が少しずつ発展し今の自分の生活があるという認識を持つている。虫を食べていた頃と比べて自分の今の生活が優れているのかと問われれば、不思議とそうでもない。

夕食後妻の菜月と部屋で音楽を流し聴いているのだが、最近録音された自然の音を聞いている。なんて滑稽なことだと自分では思っているのだが、やめられない。虚^{うつろ}だとはわかつていても心地がいい。読書や作業が捗^{はかど}る。雨の日は何もかけずに雨の音を2人で聞くのが楽しみである。クラシックは荘厳で落ち着いた着かないが、音楽を聴く事が目的の場合は最高である。ジャズ

は心地いい音が会話に弾みをつける。聞こえていても意識せず、そつとそばにある音を最近好んでいる。菜月と昨日も鴨川を歩いてきた。他愛もない話をしながら空気を吸う時間がかけがえなく心地良い。結局なぜ落ち着くかは、分からない。



新世代いけばな展 11/4～6 立誠ガーデン・ヒューリック京都



いけばなインターナショナル神戸 11月例会 11/11 神戸倶楽部

蝦夷松の立花

△表紙の花▽

花型 直真立花

花材 蝦夷松(松科)

蝦夷竜胆(竜胆科)

蔓梅擬(錦木科)

梅(松科)

椿(椿科)

檜(檜科)

鎌柄(薔薇科)

乱れ菊2種(菊科)

花器 陶花器(清水六兵衛作)

日本いけばな芸術展出品作



上野淳泉 桑原健一郎
山本慶智 大野慶友
杉浦慶弥

最高のお花を最高の器で最高の人達と生け込み。五人席の内の1人として立花を立てました。蝦夷松を主に蝦夷竜胆が顔をのぞかせ、様々な花が顔をのぞかせる。毎朝の水替え、手直しも楽しく良い状態をご覧頂けた。この立花が出来上がった時、下山をした時の満足感に近いものを感じた。気持ちいい山歩きだった。

健一郎

『仙齋彩歳』と

『ホッホチャンとケンチャン』

をネットですべて

父の「仙齋彩歳」と母の「ホッホチャンとケンチャン」。この2冊の本には両親のメッセージが詰まっています。この12月で父が亡くなり

10年となる節目に、これら2冊の内容もいつでも誰でも見られるように公開することにしました。

ふとした時に思い出していただき、スマートフォンなどで両親の言葉に再び触れていただければ幸いです。 仙溪

『仙齋彩歳』『ホッホチャンとケンチャン』『テキスト50年分』ほかをご覧ください。←



<https://www.kuwaharasankei.net>

花伝書を見る

立花 りっか まつのきしん 松除真

「南天の洞」

富春軒

松 若松 伊吹 晒木 南天

柘植 つげ 小柏 小菊 著我 しるが

(立花時勢粧・下)

中段の南天を境に、上段と下段の景色が違う。上段の色が抑えられているので、赤い実が際立って見える。



上段右上へ立ち昇るのは松の若木だろうか。だとすれば、老松の間に伸びる若い松の初々しさが加わることで、南天の赤い実りが益々映えてくる。

富春軒



枯れヒマワリ

△12頁の花▽

花材

枯れ向日葵3種（菊科）

芭蕉の枯葉（芭蕉科）

薔薇2種（薔薇科）

木苺（薔薇科）

花器 陶花器（近藤豊作）

日本いけばな芸術展出品作

横田慶重 米山慶嘉

川瀬慶裕

枯れヒマワリと呼ばれるけれど、無数の実りが詰まったその顔は艶やかで美しい。その美しさを知っている栽培家によって種が欠けてしまわぬように大切に梱包され、乾いた茎には添え木までされている。

そういえば、3月の流展で私がいた桜はとても大きな枝で、束を解くと数百箇所の小枝が丁寧に紐で絞られていた。気の遠くなるような作業だ。この老桜をどれほど大切にしていたのだろうと想像しながら聞いていたら、いつのまにか桜の立花を立て終えていた。

いける花を届けてくれた人のことを思うことで、その花への思いはより深くなる。いけばなは外見的には花と器の世界だが、そこには多くの人の思いが加わっているのだ。